川柳の雑誌

四月號

★最高權威の月刊柳誌

川柳雜誌　四月號目次

★

表紙……（大阪・中之島風景……福富雷童）
内外時事……不死鳥……（一）
川柳人と改號問題……小山文三……（二）
戰爭が生んだ言葉……路郎・丹路・鮎美・豆秋・某人・水客・……（六）
月評　川柳一ト筋……巢香・湖花・亞鈍……（八）
煙のないタバコ……古川風竹……（二）
ユーモアを探る　種痘の跡……澤田四郎作……（三）
武玉川四篇研究（五）……梅本秋の屋・森東魚……（八）
川柳横町……蛭子省二……（五）
川柳二千六百年史（四）……戸田鳳蓬……（一三）
柳柿の木……蛭子省二……（三）
貝釦……岡田某人……（二）
漫畫陣中線……北みきを……（七）
映畫に川柳を觀る……孤篷・白面人・豆秋・笑……（一五）

★

近作柳稿……麻生路郎選……（一〇）
川柳塔……麻生路郎選……（一四）
同舟近詠……緒家……（六）
日本柳壇百人撰……（一四）
不朽洞句抄……麻生路郎……（一）
一路女……麻生虔乃選……（一六）
葉車・亭……濱田久米雄選
各地柳壇……（一七）
柳界展望……（一二）
川・陽……（一四）
俠記……（一〇）
社關係の人々……（一〇）

★兵士は戰線に！我等は銃後に！！

藤村誠一氏著

（背景は書齋の一隅）

隨想集

詩人複眼

序　麻生路郎氏
百田宗治氏
跋　吉川則比古氏
裝幀　田村孝之介氏

「大阪毎日」曰く——

「詩人藤村誠一氏の隨想集、收めるもの『蜻蛉夫婦』以下十八篇、いづれも輕妙な明るい文章の中に人生を語り、機智と諷刺と諧謔ですばらしい料理法をみせてゐる、何よりもまづ楽しく讀める隨想集である」と。

★「詩人複眼」は月刊「川柳雜誌」へ藤村誠一氏が高鷲亞鈍のペンネームで執筆連載の隨想集に「日本詩壇」「日本文藝」「婦女世界」「上方二十世紀」等へ發表の數篇を「詩人胡座」の題下に一括增補した近代人必讀の書である。定價壹圓（送費六錢）—海外送料實費—

麻生路郎著

新川柳評釋

「川雜投句箋」

定價八拾錢　送料六錢
一册十五錢　送料三錢

發行所　不朽洞
堺市出島町三五一
振替大阪三〇三九二

安産のために

雌娠としての大切な責任はガルシユームを補給し、二で諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀨醫學博士述
「安産のために」一册子呈上

樹林醫學博士　推奨
片瀨醫學博士　監査

ワダカルシユーム錠

大阪道修町　和田卯助商店

麻生路郎★主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

川柳雜誌

195

第十七巻　第四號

不朽洞句抄

麻生路郎

新郎新婦に捧ぐ

よしや道は遠くともふたり
五十過ぎ火鉢を抱いて子を叱り
犬を飼ひ猫を育てて貯金帳
バナナ林檎みかんを選むさへ迷ひ
人の字は夫婦か支へ支へられ
ものわすれするもさびしきもののうち

内外時事

☆チブス饅頭事件大阪控訴院で菊子に殺人並に殺人未遂の斷罪で懲役八年の判決（三月四日）

★行司木村庄之助逝く享年六十五（九日）

☆安部磯雄氏社大を離黨（廿一日）

★フランス文學の耆宿吉江喬松博士永眠（二十六日）

☆第七十五議會は二十四日で開期滿了、二日間延長廿六日終幕（二十六日）

★南京還都の和平記念日（三十日）

☆四月一日から電車内での喫煙は絶對禁止

★電力調整令下の夜櫻用電燈は保安上必要なるものに限り點登を許し、電飾は一切許さず

川柳人と改號問題

——變な雅號及び同號の持主へ——

文人墨客が雅號を用ひはじめたのはいつ頃からであるか詳かでないが、その作品に長つたらしい名を附することは、繪畫の如きはその全體の體裁をぶち毀はすことになるので所謂雅號を用ひて自己の署名としたものであらう。中には何ンの某であることを知られたくないために假名程度に、これを用ひた人々もあつたであらうことは想像に難くない。故人の淺井五葉は、雅筆によく五葉とだけ書いて、淺井を書くことを避けてゐた。殊に川柳には五葉で澤山だといふ說をもつてゐた。自分の仕事の方の人たちに餘り知られたくないといふのが彼の意見だつた。殊でもないものを書いたり、作つたりしてゐるのだと誤解されることを極度に怖れてゐたのである。「一々辯解も出來ず、痛くない腹をさぐられるのはイヤだからネ」とも云つてゐた。

しかし、これは五葉の雅號に對する態度であつて、人によれば、雅號の方が有名で、本名を名乘つた場合一體どなたでしたネと云はれそうな人々もかなり多いのであるから、雅號の効用も又偉大であると云はねばならない。

川柳に用ひる雅號では明治時代には××坊（例、劍花坊・幻怪坊）だの△△子（例、三面子・而笑子）のやうに、坊や子のついた名が多く目立つてゐた。それに川柳は滑稽なもの、オドケたものといふ先入感から雅號にまで、オドケた雅號（例、けちん坊・赤ン坊）フザケた雅號（例、土左衞門・珍竹林・出鱈目・維想樓）の持主が相當に多かつた。これは德川時代の狂歌人などの惡影響であることは云ふまでもないが、思想的に川柳を輕く見てゐた人たちの謬見から自己の作品を自ら尊重することを知らなかつたからであらう。

それが明治末期から花火線香のやうに、問題視され、時々改號論が雜誌の一隅を賑はした。そして明治から大正へ、大正から昭和へと漸減の形をとり、今では地方柳誌に多少散見する程度になつたが、一時は半ば以上がそれであつたと云つてもいゝだらう。藤村青明などは一時極端論者で句を本名の藤村一で發表した時代もあつた。

川柳の內容に、多分の滑稽やユーモアや、穿ちがあらうとも雅號までが、そうであらねばならぬといふ理由はあるまい。四月一日から映畫法による寫督、俳優、カメラマンなどの登錄制度が實施されるので、當局はこれを機會に時局柄俳優で風致上面白からぬ藝名を使用してゐるもの、不敬にわたるもの、或は外國人に紛はしいものなどを一切改名させるそうであるが、川柳人の改號は時局柄多事多端な當局の手を煩はすまでもなく多少共誤解され易いと思はれるやうな雅號の持主はこの際斷然改號されたいものである。

それと同時に、同號の持主に對しても少しく言及して置きたい。

全國の柳誌を見てゐると五人位同號（例、かほる）の持主があるが雅號を用ひる以上、自他の區別を明にする意味から云つても、かゝる場合には、改號をすることが自他共に利便であらうと思ふ。曾て西垣物外は物外和尚と同じではといふので自ら松雨と改めた。橋本三柳子君が往々女性と間違はれるので、綠雨と改號した時に、明治文壇の齋藤綠雨と同號ではといふ聲が一部にあつたが、橋本綠雨君には綠雨君の意見があつたのか、それを押切つて今日に及び川柳の綠雨となつてしまつたが、これは齋藤綠雨が既に故人であり、又川柳家でない點から觀て間違ひを生ずることもなからうし、その點、恕することが出來やうが同じく川柳に遊んで同時代の作家であり、同一柳誌に同號の句を發表される場合に於ては明らかに、自他共に誤解と不便を感ずる點が多々あるであらうと思ふ。この際、先輩が進んで改號する場合は別として、先づ後進が先輩のために、改號するのが禮ではあるまいか。仲には此の雅號は小學校時代から使用してゐるのでおそらく自己の方が長く使用してゐる雅號であらうなどと、ひそかに呼號？をされる人達があるかも知れないが、それは使用年月の問題でなく常識と先進への禮との二點を考慮し、川柳發表上の雅號を改稱することは、頗ぶる當を得た措置ではあるまいか。句は人格である。斯くしてこそ、その人の句が光るのではあるまいか。

（不死鳥）

高澤一淚氏の近影（哇布）

川柳雜誌社協會
柳人不朽洞會
川柳人會
理事長

西日本鐵道川柳大會（寫眞說明一五頁參照）

ムッソリーニ
ペン

書きよく
錆びず
強くて
値の廉い
純國產
ペン

元賣發 ムッソリーニペン
內外文房具卸商
大阪 株式會社 澤井商店

ユーモアを探る ①

種痘の跡

澤田四郎作

婦人の晴れの服裝が振袖からイブニングドレスに變つてくると腕のほくろや毛深さが問題になつてくる。この過渡期にある母親たちは長屋住ひをしてゐても、子供は大きくなれば必ず夜會服を必ず着る樣になるものと確信して赤ん坊の腕を心配する。國法の定むる種痘の方法はランセットで十字に皮膚を搔いて種痘する事になつてゐるのでその痕が目立つので、いろ〳〵工夫してその痕を隱そうと相談を醫師にもちかける。自分は女の子であれば上膊の內側に種痘をする。腕の下までのぞく時代はちよつと來ないと思へるし、痒くて無意識に搔く事もなく淋巴腺炎も起した例もないから最上の方法と思つてゐる。外來患者を診てゐると、いろ〳〵と工夫した先生達の業蹟を拜見する。それには「ユーモアを探る」の題になりそうなのを一二書いてみます。兩肩の上に三つ、星が植ゑつけてあるのがある。女の上等兵を想像する非常時風景である。ある一例は足の兩側に三つゞつずらりと植ゑつけてある。自分等の中學生の頃にはいたゲートルの釦を聯想して微笑を催してくる。最も秀拔なのは××の兩側に三つづゝこの釦がつけてあるのを見た事がある。この赤ん坊が大きくなつて夫を迎へる日の事を想像すると、これは全くユーモアではなさすぎる樣な氣がする。

筆者——小兒科醫、醫學博士、民俗學研究家、大阪民俗談話會主宰。

貝釦

岡田某人

新筍。月のものつてなあに。

しゞみ。べちやくちやべちやくちや先生お早う、先生お早う。

大豆の煮たの。これが最も生活的である。

淺利。早く蛤になりてえや。

菠薐草。うまれは京の由舍どす。

鰻のみりん干。同潤會經營住宅。

笹搔き午蒡。大學は出たけれど……。

鱧の皮。世帶を持つてもう何年になるかしら。

煙のないタバコ

古川風竹

◇——事變以來ハワイの同胞は何萬かの慰問袋を前線の兵隊さんや、內地の病院にゐる傷痍兵士に贈つた。中身それ〳〵異なつてゐるだろうが、慰問手紙の外に、申し合せたやうに卷煙草の一袋二袋が入れてあるやうだ。

◇——それは事變のニュース映畫などで兵隊さんが一本の卷煙草も大事さうに、みんなで嬉しさうに喫んでゐる情景を見たり、聞いたりするので、兵隊さんにメリケン煙草を喫はせてあげたいといふ優しい心からで、送る人は大部分女性である。

◇——ところが其慰問袋が六ケ月も經つて、やつと届くので香りが失せてゐるのは氣の毒である。それだけでなく、洗濯石鹼を一所に入れたため石鹼のナフタ(揮發油)の移り香で折角の煙草も風味が變になつてゐるといふ事も聞いた。

◇——煙草はサスセステブルなもので移り香がし易い。ナフタリンを入れた簞笥の抽斗に永く藏まつて置いた卷煙草はナフタリンの香ひで、とても喫めないことを私は經驗する。

◇——映畫といへば、數年前早川雪舟主演の映畫「大楠公」をホノルルで觀た。いよ〳〵正成が湊川に出陣する、河內の野を菊水の旗を飜した兵馬が進む場面。畑を耕やす農夫らは手を休めて「ハア、また戰さが始まるかの、楠樣が出陣さつしやるだ」などと言ひながら煙管を出して一服する。

◇——それは極めて自然な情景ではあるが、私はフト農夫の喫ふ煙草に不審を抱いた。日本に初めてタバコが傳來したのは慶長の初年とある。楠氏が湊川で討死した延元元年とは二百五十年からのヒラキがある。映畫監督が不用意に入れた農夫の煙草は、時代劇に電信柱が現はれる以上の時代錯誤である。

◇——煙草は人間婚好物の隨一であると共に社交の用具であることは今更云ふまでもない。互に煙草を喫ひながら喧嘩もできない。アメリカのインデアンは「和平の煙草」と云つて仲直りの煙草を喫ふ風習があるのもそれだ。

◇——タバコは煙の草と書くほどで、火をつけて喫ふのが本格であるが、必ずしも、さうでなく西洋には「チュー、タバコ」といふ嚙みタバコもあれば、スナッフといふ嗅ぎ煙草もある。需要の點からは卷煙草、葉卷、パイプ煙草(刻み)、嚙み煙草、スナッフの順である。

◇——ガスリンや火藥、其他發火性物を取扱ふ工場、潛水艦など絕對禁煙の場所では、煙草吸ひの者はチュー煙草か、スナッフでなりと渴を醫すので、この方面の需要も少くない。

◇——筆者が初めて米國へ來たとき一人の黑人勞働者が赤黑い唾を吐くを見て「黑ん坊は唾までダークなのか」と先輩に訊くと「さうだとも……君、黑ん坊は〇液まで黑味を帶びてゐるんだよ」と眞面目に答へた。私は完全に擔がれたのだつた。黑人は嚙み煙草の唾液を吐いたのだつた。

◇——私も煙草である婦人を擔いだことがある。「シガー(葉卷)は、どこの國にできるのでしやう」との間に「あれは熱帶國の煙草の樹にバナナのやうに房になつて實るのです」と。

(在ホノルル)

戰爭が生んだ言葉

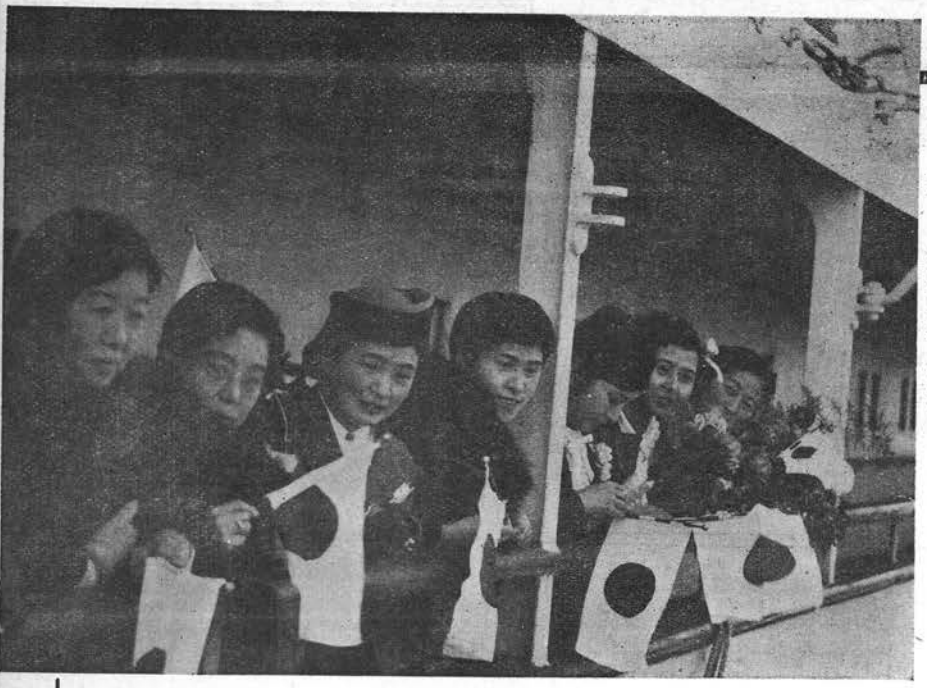
小山文三

戰爭にはいろ〳〵新しい言葉や熟語なぞが生れるものである思ふに國運を賭し、生命を懸け初めて用ゐられて其警拔と雅訓を賞揚されたし、皇國の興廢や敍々相靡すなぞの勇壯な熟字は當時の若き血を彌が上にも沸きたたせるに十分であつた。其他に澤山の言葉が生れたが今日人口に膾炙されてゐるものは左程多くはない。

名物 とんかつ
揚ぢ立て 丸ヨ
電北 六五 六九 七四 五八 番

て戰ふのであるから熟情、感激の極まる處詩情を新にするが爲めであろう。

日露戰爭には肉彈だの銃後だのの言葉が櫻井忠溫氏に因りて



（端右最てつ向）行支南中の（妹令氏蘭保佐）んさ子也美部阿家柳川秀閏
（てに丸砂高の帆出戸神）

櫻田麩。實に不潔だ、いろんなことをして來たらしい。

ソーセーヂ。退屈だ、ね、そうでせう。

かぶら。濱職の嫌疑あり。

※

蕨。高邁なる詩情。但し都會へ出るとすつかり勝手がちがつてしまつて、落魄します。

※

陽の光にキラキラする河と、そのまはりに展けた大盆地。時折地上の青みから、もう一つの青みが浮上つて、まるで呼吸でもするやうにはなやかな色とかはり、又もとの青味になりながら波立つ。鳥だ。一めんの鳥の雲だ。聖なる河は、そのあひまあひまからひかりを現はしてするどい。

※

琴の話。ふるびたものがたり小さな、薄紙を敷いたカステーラ。

家の裏には溝を埋めた庭があり、ボコボコの土にいろんなものが育つてゐる。ゆすら梅の舌ざはり、あの生毛。

ずつと以前に、住吉で買つてもらつた十二支の豆人形を落したが、今はその溝の底で思ひ思ひにころがつてゐることであらう。

斯くして生れ出たる新熟語は又逸早く忘れられるものであつて餘程よい言葉でない限り後世に殘り得ないものである。

今度の事變に於ては國民精神總動員なンて非常に意義深い熟語が生れ「國家經倫の根本義は國民精神總動員に因るの外はない」と絶叫するに至つた。

軍事に於ける渡洋爆擊なぞは恐らく劃期的な文字と云へようし、海の荒鷲、陸の荒鷲等と唱へて其勇敢俊敏を表徴した。

輸卒が特務兵、廢兵を傷痍軍人と改めた等は事變以前の事でもあろうが此事變と關係が深い樣に思ふ。

外交上「蔣介石を相手とせず」の聲明があり獨ソ不可侵條約成立によつて「複雜怪奇」なぞの新表徴語が生れてゐる。

軍事行動には「緊密なる連絡」の語があつて力强い感を與へてゐる。

統制經濟下に於て最も嫌味を感ずるのは「闇取引」と言ふ流行語であるし「買溜め」「賣惜しみ」等の言葉は必ずしも新しい言葉ではないが事變下に於ては嫌忌す可と深い意義を感ずる樣に思はれる。

東京には「陳情ホテル」と言ふのがあつて統制下に「配給」「割當」「資金調整」「過去の實績」等を其筋に陳情する猛者連の泊り込んでゐる某々二三のホテルを指すのだとの事である。

「禁綿事件」で引つ掛つた等と聞いただけでは後世の歴史家ならずとも一寸判りにくい新語であろう、「荒天で石炭の輸送が渡れた」なぞの言葉は必ずしも新味ある譯ではないが此事變下聞いては言外の意義が深い樣に感ずる。

「麥と兵隊」の著以來「士と兵隊」「何と兵隊」なぞの戰爭文字が生れてゐるのは面白い。

「軍務公用」ですから至急御歸り下さいなぞと甲子園球場や、國技館あたりでアナウンスされると、緣のない觀衆までが拍手を以て敬意を表する等は國民精神の發露として至上のものであろうし、「應召」の言葉と共に永く後世に殘る言葉であろうと思ふ。

「靖國神社で會おう」は如何にも莊重、嚴肅、悲壯な言葉で所謂生還を期せざる決意の外に盡忠報國の赤誠が溢れて、自ら頭の下る心地がする。

「興亞の新秩序」「事變處理」等は崇高な目的を持つた極めて有意義な新熟語であつて擧國一致此大精神を達成しなければならないのである。之に反して「金魚の泳げる酒」、「首吊りが助かるスフの紐」なんぞの新語は絶滅を期したいものである。

（昭和一五——三——三稿）

柿の木

——病室手帖（その五）——

姪子省三

前項に、柿盗の詩趣に言及したが、それを詠むだ古センリウには、今迄に、私の知るところでは、一つとして感服するものがない。故に、新課題として力作が望ましい。古俳句には、「菊の日や高見へのぼる柿盗」也有作がある。多少道具揃ひの氣味だ。

小邸には一本の柿の木がある扁平と長方形のとが實り、紅色過ぎる。廣島からくる酒藏男が「私の國では猖々柿といふ」と。職掌柄、話に愛嬌がある。殆んど澁い、中には甘いのも交る。繼木事情ならんか。木は小さいのに數多くなる。いつ迄も木に置くので、毎年一夜にして盗人にとられる。凡そ、その盗人はわかつて居るのだから面白い。昨年も同じ事を繰返し、私共夫妻の話題となる。でも十數ヶ殘してあつたので、採つて初物とし佛壇に供へた。

正月十五日は小豆粥だ。一碗食べる。私は柿の木の下までゆく健康がないから、老妻に一人二役の、嫁樹の年中行事をやつて貰ふ。俗に果樹貰めと云つて日本全國に行はれたもの、今は忘れられてしまつたが、隨分古い素朴な風習であるかに思ふ。特に研究もしてゐないから想像ではある。それは五倍子博士の「戸倉峠」にも、未だ同地方には遺つてゐて、

「セチブン（節分）のヨサに行ふ二人が柿の木の下に行き、一人がお前は柿がならんで來年なればこらへてやるが、ならんとぶちきるぞと双物をふり上げると、一人がなりますからこらへてくれといつてやめる」

で、私は「高麗」誌上「咲眉主百信」の廿二信に、少し書いた事があるが、處によつては十五日粥を柿の木の股に上せる外、仕業はそれ〳〵異う。老妻が「なるかならんか」の役と、「なりますなります」の役とを演じて呉れたから、今年も柿盗を喜ばせ得るのである。

「民族點描」には各地のが載つて居る。「山形市附近の村々では正月十五日の朝に、團子を茹でた汁を手桶に汲みとり、一人これを提げ、他の一人は大鉈を携へて、宅地内の栗柿梅などの果樹に對して、鉈の者が聲高く、實るかならぬか實らざら鉈もて打切り申すぞ、と喚き乍ら鉈もて少しく幹を切ると、手桶を提げた者が聲に應じて、實ります なります、と答へながら汁を切

（以下十二頁下段へ）

川柳塔

‖路郎選‖

千客萬來口說て欲しい方がなし　ハワイ　高澤一浪

兒に何の罪か肉塊なぞと呼び
生きて行く手だてくちづけするのです
てもさてもあれが人妻とは悲し
理に落ちた話は咳を聞くばかり
ものやつて相手のすきを見出さん
女から覺悟を先に聞かされた
別れますそうしますかとそれつきり
保險屋も死ねば儲かるとは言はず
肺をやむこと明かしてもよい時分
夕顔のたねとはつきり亡妻の筆
要らぬ子と生れて父の名も知らず　大阪　戸田孤篷

背廣新調亦ごんな嘘つくつもり
弱い奴マスクをしても風邪を引き
晴着きて醫者にはらわたさぐられる　兵庫縣川西町　戸倉普天

銀狐サモ寒むそうな拔き衣紋
正雄チヤンごこぢやと呼んでる滿員車
軍服で出れば課長の上の星
統制に外れる樣に〳〵生き　大阪　橋本綠雨

外米に政府をうらむ人も出來
こんなものを買はされますと婦人會
休職に酒のない日が續くなり
酒樽が自慢で呑めと云はぬなり　大阪　高橋かほる

興亞奉公日の中座見物
伊賀越道中双六
印籠を盗むお米のよい姿
鴈のたより
身共等に夜は深々と更け渡り　大阪　奥村丹路

二號邸にもへんぽんたり國旗
子の寢顔或は父をかなしませ
泰然として散髮の椅子にあり
女房は怒つてゐるなと本を讀み
錢湯であぐらをかいて在しまし
遊びにも行かず寒さに敗けておき
强ひられた貯金がたまる面白さ
男への苦勞に生きる道を行き
罰金の嵩に正比例して儲け　張家口　岩崎柳路

慰問の娘白衣へちやんと舞納め
宣撫班見よ東海の聲高く
教室を今更ら覗く卒業日
陽氣な姑娘大正琴へ足を組み　兵庫縣　寺井鋭々

越後赤倉スキー行(七句)
撮つてほしい姿勢になれずスキー服
擔ぐ方が早い初心のスキー也
樹の方へ初心のスキー行きたがり
颯爽とスキーを履けばもう轉げ
人生五十之からスキー初めます
雪やけでスキーの旅はかくされず
新婚のスキー林で憩んでる

大阪の街(九句)
市廳舍を教へる方も國訛り
福島で夜だけ琵琶を教へてる
曾根崎の朧を飲みに誘ふてる
梅田道安サラリーと易者踏み
ランチタイムの日がさん〳〵と御堂筋
一張羅初天神の雪に濡れ
ステツキを買ひたし心齋橋の春
雨下駄の音輕う聞く島の內
戎橋の春雨に濡れた撥紬紗　大阪　岡田某人

旅——田舍
夜行今朝思はぬ雪へ窓を明け
關門の雪旅びとの眼に眩し
せわしない旅程常着で送られる
下關放浪的な醉となり
下關君も大陸がへりかね
はなし好き二人關門雨細し
獨りかへる車窓煤がたまり煤がたまり　尼崎　酒井斗風

ワツプル屋おちよぼもまじる春の宵
債券を賣つた日の雲足迅し
はるの雨一俵の炭のおきごころ
乘る女の横顔がいゝ春のバス　大阪　北川春巢

婚約の一日三十時にも思へ
大尉殿と歩けば敬禮ばかりされ
千人針左ギツチョは恥しい
代用品づくめ成金らしう見え　下關　櫻川不水

眼鏡なぞ付けて按摩が櫻へ來
ぎり〳〵のとこへ女房又孕み
ひら〳〵と舞へば百圓札も紙
日銀の內じやうつかり酒落も出ず
俺達が肥やしたバーの別莊地　大阪　田中風葉

ハイキング冷たいうどん喰はされる
縫ひかけの帶を隱した許嫁
自動車を舞妓一番先に降り
献金の列に舞妓も並んでる
戯談は女車掌も負けて居ず　大阪　北山悟郎

母親の甘さは今日も爲替組み
初陣のニュース愉快な父となる
雨よ降れ〳〵にごうの姿ちらとみる　兵庫縣　水谷鮎美

髭剃つてゐるこ昇給辭令くる
朝詣り水商賣の娘がひこり

故郷に還る夕鐘君に贈る(二句)

三十九望む船出に帆は眞白ろ
神様は海を渡れこのたまひぬ

大阪 姫田夕鐘

第二の故郷大阪を去る(四句)

大阪を立退きぎわの戎橋
橋筋の人へもまれに出る名殘
歌舞伎座も暫しの別れ見上げられ
安治川の煙も今は懷しき
番傘へ霰のおごる音こなり
さりながら時だ轉業してこませ

名古屋 吉田水車

暗らければ暗いで流行る百貨店
奥様へお供合槌打つばかり

左團治丈逝く

堀端の聲がこゞかぬ淋しさや
マスク外して女それからしやべるここ

鎌倉にて

大佛は矢聲を聞いた顏でなし
東京の廣さへ重い支那そば屋
行きずりの女の姿態も春こなり
素人大工あたら日曜ふいにする

學校へ行けぬ病ひへランドセル
子の病氣頼み甲斐なき炭屋なり
病人へ男手こ云ふ鹽加減
春がくる心になつた齒磨粉

大阪 妹尾八九滿

兒の寫眞燒くぞこ友の顏こ顏
征け友の後姿に眼をつむり

南支 宮岡白峯

節米日々(二句)

ありがたく飯喰ふばかり冬の雨
讀んでやる繪本幾冊店の暇
天井は夜泣きの子からこがらせる

松本 石曾根民郎

佛具屋の大きな珠數を懸けて春
珠數もつて出歩くここを覺えてき
虫のすかぬ男こ毎度連れになり
土砂降りへみな出勤の折鞄
鹿のゐる冬の景色はなほ寒い
畑の雪汽車たそがれのなかをゆく
女名の傘で一番電車に居

大阪 正本水客

影長く二人坂道下りてくる
噂ふこ歸つた女へむけられる

豊中 黒川紫香

豆コーヒ破けた雜誌開げて見
ふこ塲末きつい音譜をかけて暮れ

大阪 丸尾潮花

戀の手は切れず歌詠む日がつづき
素うどんを頼んで歸る姉藝者
美しい人の嘆きを聞く灯影
宿の名の傘で新婚迎へられ

大阪 岩橋双虎

客に慣れて長女はませた口をきゝ
歸還して一人うなづくここがあり
人間に好かれるコツを知つて無事

廣島 濱田久米雄

さみしさは猫脊こ春を話し合ひ
青切符都落ちこは見えぬなり
訪問着春にこけ込む聲で來る
小役人春へ大きな嚏が出
盃に追從笑ひがひこしきり

大阪 清水史路

金賣つた意識さば〳〵鰯燒く
それはいゝニュースだ廻轉椅子が鳴る

紀元節

ラヂオいま尊し佳節のみここのり
生みたての玉子見舞の袂から
胸病んで妻の肩掛して睡る

川柳横町

★不水の次男坊(十歳)が「地球がひつくりかへれば太陽は西から出る」とらがりに加藤清正汗かいた」といふ大人の作れない句を作つたそうな。流石に玄海灘を年中往復してゐる不水の次男だ。

★夜王が國策に沿うて鶏を飼つたのはいゝが、鶏に愛情を感じ出して「何んぼ鶏かて殘飯で飼うたのでは玉子は生まんよ大きな良い玉子を生ませるのには矢張り鶏の營養を考へてやらねば不可ん」と云つて、近ごろでは「わかもと」をのませるやら、特別の喰べものを奥さんに料理させるやら大騒ぎだ。今に金の玉子を生むかも知れない。

★蔑乃も國策に沿うて横手の庭へ、菠稜草や、赤蕪やいろんな種子を蒔いたのはいゝが、碌に水をやるひまがないので、漬物の代用品にもならない。ソレでも義理に芽を出したり、葉を出したりしてゐるのがうれしいらしい。

★「犬はなか〳〵賢うてな。人情をよく解するぜ」と例によつて豆秋の犬の話がはじまる。「醉うて戻つて妻君に叱られてゐると犬が妻君の顏を見上げて、もうその位でエーやないかといふ顏をするぜ、可愛いもんや、それから人間が外米の混食を喰べてゐるのに、犬はわしの喰べるものと違うといふやうな顏をしてブーッとあつちを向ひてしまう犬は統制を知らんでな、」といふ。一ペン川雜で犬の座談會でもやるかな。

同舟近詠

松山　前田五健

お遍路の美くしければ尚寂し
紙芝居うつかり僕も見て終ふ
負惜みらしく聞えるスフの論
叱られる子の身にもなる破れスフ
お說ゴモットモ大臣も困る組
眼をつむる顏がいミしい受驗の子
皆な當る氣の一萬圓だ笑へまい

金澤　安川久留美

僧も乞食も櫻の下に眠く成
夢まごか良寛樣のニセ屛風
質札も色紙型ミは色氣有
ふミんから兄キの方が押し出され

兵庫縣御影町　長崎柳秀

月一ッ露次のくらしへついて來る
方針を變へる息子の氣を案じ
神棚へ詫びて供へる七分搗
診察をまつ座布團を不氣味がり
二次會の料理さつきも食べたもの
春の河櫓をこぐ音の和やかさ
吸殼に昨夜の客の煙草好き

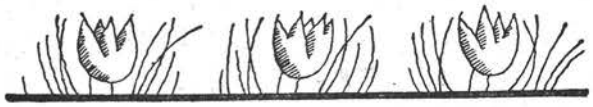
今治　長野文庫

明日履く下駄を疊の上で履く
自叙傳は上手に嘘を云ひ廻はし
人中へ武裝して出るかんしよ病み
もの云はぬ日もある由の寺男
かくれんほ足の方から見付けられ

神戸　潮田明坊

現在の醫術だけではねミ祈禱
子の顏が笑つてくれるから强し
妻責める日もあり物が騰りづめ
苦境打開策夫婦の下駄がチビ
肚のない男の顏が蒼白し

病中吟



月評　川柳一筋

人某・秋豆・美鮎・路丹・郎路
鈍亞・花潮・香紫・水客

○今月の表紙は素晴しいね。
△先づ川柳の雜誌ではピカ一だなア。
□內容の紙質の良さだつて、他誌の追隨を許しませんねェ。
丹路＝內輪話はそれ位に止めて、今日も例月にならつて始めませう。
某人＝一つ新しい人から口をきいて貰ひませうか。
丹路＝そうですね。潮花さん水客さん、紫香さんあたり……
紫香提出＝近作柳樽

生きて行く道を妹に敎へられ　森本秋子

紫香＝森本秋子さんは潮花君の御存知の方らしく、今までの句を詠むと潮花君に似てゐるやうに思ひます。どういふ階級の方といふか、どの程度の人か一つも知りませんが、この場合姉ですね。つまり句主ですが、失戀したかなんかで人生の希望を失つたのを妹から生きてゆく道を敎へられたといふ風にみたのですが。
某人＝僕は仕事だとか、階級だとかより、妹がまづ未婚又は今までに姉が味つた苦しみを味つてゐない年頃だと思ふし、それ丈でこの世界が出てくるやうに思ふ。
豆秋＝性格的に言へばこの妹は線が太い。姉は細いといふ事でせう。
水客＝結局、性格の相違ですね。
潮花＝秋子といふ人は總體に暗い句を作るやうに思ふんですけれど。
某人＝これは速記で發表しないで宜しいが、年齡は幾つと幾つですか？
潮花＝姉は○○、妹は○○で結婚せんといふんです。
某人＝やつぱり妹が結婚してゐない朗かさ、强さをいつてるんですネ。
鮎美＝僕も妹が乙女で、姉さんが失戀した人で、そこに姉さんが妹さんのアドけない純情さをみて、沸然と昔に歸つて希望といふものを持ち始めたといふ解釋をします。
豆秋提出＝近作柳樽

我家はなか〳〵建てぬ大工さん　金井串郎

豆秋＝あの、なか〳〵が副詞で――コレ副詞ですな――（肯定する者二、三あり）大いに効ていゐると思ひます。「一万圓位なかなか儲からず」（矢田冷刀）もなか〳〵効いてゐますが、このなか〳〵も効いてます。
水客＝その場合、位が効いてますね。
豆秋＝副詞が句を惹きたてたといふので、この句を出しました。
水客＝實際の場合に大工が自分の家を建てるといふ事は可笑しい。大工は頭梁でなく、現實では小大工であつて、自分の家を建てるなどといふ事は想像されません。
某人＝それは理窟つぽく考へたらそうで可笑しいんだね。亞鈍が着物ばつかり着てゐるといつたやうな意味だよ。（筆者註、亞鈍は洋服屋なりき）
路郎＝恰度、百姓が米や麥を作つて、良いものは他人に賣つて惡いものを食ふ。大工も他人の家を建てても自分の家を建てないといふ矛盾に穿ちがあるんですね。この作家はなか〳〵穿ちの句が巧い。
丹路＝我が家はの句は、いくらか思想的に幼いといふか、甘いといふかさういふ氣がするんです。「親だけは家出を謎にしてしまひ」の方が深いものを持つてゐはしないかと考へますが。
某人＝それは、我家は、の句の穿ちが露骨なために、そういふ氣がするんぢやないか。
丹路＝露骨よりも誰しも考へる點ですネ。
某人＝さうですねえ。僕も親だけはの句が良いやうに思ひますねえ。
路郎＝「我が家」は單なる穿ちそこに矛盾が生んだユーモア味「親だけは」は人情味が根幹をなしてゐる、その差が、「我が家は」の句と比較して惹きたつんぢやなからうか……。
某人提出＝近作柳樽

啖吐くな啖のみこめといふごとし　大森風來子

某人＝痛烈な皮肉の句、多少親しみ難い氣がするが、然し皮肉に進むなればこれ位の鋭い行き方といふものを推稱す可きだと思ふ。皮肉の如く見えて實は誰しも考へてゐるやうな事であつたり、ユーモアの如くであつて、而も誰もそんな事位なことは考へ又は何らかの形で既に句にしてゐるといつた句が大半であると言つても可いのに、これ位痛烈な句をみつけた事は非常に新鮮な氣持がする。
丹路＝某人さんの評で大體盡きてゐると思ひますが、大森さんの過去の句は非常に線が細かつたやうな記憶がある。ところが此處に非常に强靱な精神をもつた句を拜見して嬉しく思つてゐます。矢張り川柳といふものは、技巧とか作句技術だけでなく、人間の精神的なものの鍛練も非常に大切で、それが爲に句が非常に向上して生きてくるやうな氣がします。
某人＝それに關聯して考へる事は、今丹路君の言はれたやうな精神的な鍛練を經てくるなれば、勢ひその作家の句味は一種の氣魄、人間に面魂が出てくるやうに一つの面魂が出てくるやうになると思ふ。ところが現在、さういふ面魂をもつた句といふものは非常に尠いんぢやないか？ノッペリとした句が多すぎるんですね。これからどん〳〵憎たらしい句が現れて川柳界といふものを、もつと强靱な立派なものにしてゆく事を望んでゐます。
豆秋＝こゝこれ、これは實感の强さで課題吟では、こんな迫力あるものは出ない。
路郎＝それで、その實例みたいな事實に最近ぶつつかつた。――その事を少しく話してみたいと思ふ――電車が北濱へ着いた時、五十過ぎの少しヨボ〳〵した男が――病氣だと言つてましたがね――車掌に長柄まで行くんだが小便がしたい、キップわたしたんだがよろしいか、と訊いてゐる。今にも小便を出したい樣子それは全く眞に迫つたやうで、車掌も降りなはれ〳〵と言つてキップを取らなかつた。ところが下へ降りるか降りんさきに、前をまくらないでパラ〳〵裾から小便が出て（笑聲）――少し電車の一二間後方まで歩いて往來のド眞ン中でヂヤア〳〵と瀧のやうにやつた。繁華街の眞ッ晝間であるにもかはらず、その態度たるや、四邊に人無きが如しに、人間の精神的なものの鍛練も非常に大切で、それが爲に句が非常に向上して生きてくるやうな氣がします。

Sata Special Klinik
呼吸器病科
内科
毎日午前　診療
醫學博士　佐多愛彦　電北3(1)
醫學博士　加藤謙一
醫學博士　螺良四郎　電尼崎1151
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町　電北八二八四

子煩腦なくてもがなを買つてくる　下關　多田市多樓

成り行きに任すと言ふも手の一つ
色眼鏡給仕怒つた眼と知らず
趣味の目に朝の車窓は深い霜
それ以上進めば神の法にふれ
いきまいて來ても女は女なり

漫畫陣中鏡 (7)

中支　北みきを

△月×日
「親はありがたいものさ、上等兵に進級してはじめてとつた寫眞を送つたところがオレの母は老眼でハツキリわからんので虫眼鏡で覗いてお前の肩の星が三つあるので安心したと云つて來た。ソラとの手紙に…」と、云ひながら、Y上等兵はホロリとした。

マスクした親と子と鼻ならべ行く　今治　渡邊曉童

生れますとも言はず五人目をはらみ
養子口今日も大島着て歩るき
大阪の話をきかれ地圖を出し
牧師の妻のミイラにも似て
やゝあつて女房酒落と氣付くなり
子を連れた遍路女難の相を持ち

きありさまなので周圍が呆氣にとられて見てゐたが、電車の中で、何處からともなく、出るものは、しやうがないなあ、と乘客の一人が言つてゐた。(笑聲)

路郎＝(續)私は、その時、車掌がキップをとらなかつたのに好感が持てた。規則づくめにゆけば職務に不忠實だといふことになるが、しかし人間としては考へさせられるものがある。中には嘘をつく人もあるが、下車して斯うした事實を明らかに見せたほど、車掌に迫力を持つた譯だ。この句が實感の句だといふ豆秋君の言葉を裏書きする爲に僕の實驗談を話す氣になつた。(笑聲)

丹路＝此人の「花嫁の流した涙を問ひつめて」のこの句ですね。最近結婚されたらしいですが、この句はいけないと思ふ。結婚といふ事實に對しても、もつと强く對していつて句にして欲しいと思ひます。

某人＝これは何か事實があつたに違ひない。その事實の芯が何處にあるかを、もう一つ考へずに輕卒に作つた句ぢやないかと思ふんです。いはば實感に溺れてゐるですね。

鮎美＝そうです。私の十年前の新婚當時頃のものを今讀んでみると、この句になりはしないかと思ふ句があります。某人さんの言はれる通り事實に遭遇して、もう一歩といふ所でこの句は表現の足りなさに失敗してゐると思ひます。

水客＝少し話は外れますが花嫁といふ言葉はどこまでを言ふんですか？　當日までですか？

丹路＝いや、披露まで……

某人＝まあ、半月位は持つな。(笑聲)

豆秋＝米や炭の値段を知る位まで、へへ。

某人＝アハハ、葱を値切るやうになつたら、でなくなる譯でせう。

潮花提出＝川柳塔

もうかれば分けよう損なら俺が持つ　北山悟郎

潮花＝この句の場合ですなア儲かるといふ見込がついてゐて相手に片棒を持たすといふか、儲かるとも儲からないともまだ判らないものを自分一人の力でやれんから相手に片棒を擔がすといふか、どちらの意味にとれば川柳的なんでせう？

水客＝これは相手の者より上の人から輕い意味で言ふてるかと思ひますが。

豆秋＝共同事業で兄貴分。兄貴。といふところ。

潮花＝氣前の良さなんですねこんな人二、三人あつたらなあ——(笑聲)——

豆秋＝そらあ。よろしいなエへへ。

水客＝隣りにゐるから言ふわけではありませんが、元來私の句はユーモアの句が尠いと自分でも思ひますが讀む場合はユーモアの句が好きで、その意味から豆秋さんの句を一番に讀みます。この句はそれでユーモアの句で面白い。別に理窟はありません。

ユーモア論＝紫香の句に寄せて

路郎＝ユーモアと言へば、後の句で「リヤカーに積める世帶に犬もゐる」(紫香)の方が面白いと思ひますね。

紫香＝私自身も、その句が好きです。

潮花＝紫香さんは動物の句が巧いですね。

路郎＝動物の句は路生さんが一番うまい。

鮎美＝しかし、紫香さんの「粉な雪が障子の穴を拔けて來た」の句は作者のデリケートな視覺でクローズ・アップした人間味を其處に受けると思ひます。

某人＝おそらく作者が障子の穴を拔けてきた粉雪をみて、所謂ユーモアを感じたんでなしに表現からくる感じでは、それを見つけた丈で何も感じなかつたんぢやないかと思ふ。

路郎＝寒い筈やなあ、ぐらひに考へたんぢやな。

丹路＝高級ユーモア……。

某人＝淨化されたユーモア。

紫香＝障子の穴を拔けて來た粉雪の行方。即ち解けてゆくその面白さを獲へたのです。

某人＝私は深刻に考へたらしい。

鮎美＝僕は輕く考へた。

路郎＝しかし僕は斯ういふ句を高級ユーモアとも上等のユーモアとも感じられないね。

某人＝高級よりも別種といつたものですね。

豆秋＝詩がありますね。詩。ハツとした詩。

丹路＝表現が美しいわりに內容が簡單だ。

鮎美＝障子の穴を拔けてきて自分の鼻の上で解けて來たヘフヘフ。(笑聲)

潮花＝そしたらペロリと舐めるやろう。

紫香＝(眞面目くさつて)それも面白いね。

丹路＝昔「川柳雜誌」に出た句で——

朝の埃りの行方を見定める　(句主不詳)
底のない桶を鷄拔けてゆき　(雞牛子)

これらは三つとも似てゐて、それぞれ味が違ひますので一寸言つてみました。

某人提出＝川柳塔

かけまくもかしこしお神酒水臭い　須崎豆秋

某人＝提出が二回になりますが、豆秋さんのこの句には頭を下げるだけだと思ふんです。

水客＝お神酒やから。(失笑)

豆秋＝これで——あの。冬の旱は珍らしかつたですからね。神戸の斷水やら。節電やら、何やら、それで神樣に水を入れるから罰……があたつた。(笑聲)

丹路＝いや實際、この頃は豆秋さん向きの時代で、得や。

鮎美提出＝同舟近詠

大阪屋この頃大阪辯てなし　長野文庫

鮎美＝つまり、この句で受けます感じは、大阪を離れて商賣をしてゐる人が大阪屋を屋號にしたまゝ段々その土地に馴れてしまう。その大阪を離れる、淡い人間の哀愁といふものが窺はれます。で好きな句です。

某人＝これで開店した當時から、現在大阪辯でなくなつた迄のかなり長い時間といふものが非常に一種の色彩をもつて現れてゐる句だと思ひます。それと同時にその特色たる大阪辯を失つて了つたあとの大阪屋に對する味氣なさも感じられて僕も好なき句です。

丹路＝先生！何か。

路郎＝或る地方の特色を出してゐる店がその地方の辯をなくして、その地に同化するといふ事は、或意味では事業的には成功したとも言へるし、又本人から言つてもその土地から言つても特色のない店になつたとも言へるわけで、そういつた經緯をこの一句でよく現してゐると思ふ。明治時代に私が東京にゐた頃、日比谷に平野屋といふ京都の料理屋が店を出してゐたが仲居がみな京都辯で、東京辯になれば歸してしまつて代りに京都から仲居を連れてくる、そこに非常に懷しいものがあつて、特殊な店であつたのを今この句から思ひ出した。そういつた意味でこの句に自分としては興味を感じた。

丹路＝え、ありがたう御座いました。(亞鈍筆記)

建國二千六百年記念「柳誌皇軍慰問」

★戰線將兵の活字饑饉に「川柳雜誌」を慰問品として御發送になりたい方は(一)柳誌慰問發送者名・雅號・住所(二)慰問柳誌の受取人の氏名隊名又は住所を明記(三)「川柳雜誌」の號數部數代前金(郵稅本社負擔)で本社內柳誌皇軍慰問係宛に御申込になれば本社は代理發送の手續をいたします。一部からでもお取扱ひいたしますが二千六百部に達したら打ち切ります。慰問誌發送者名及び部數を毎號誌上に發表いたします。至急御申込み下さい。

戸田孤蓬氏二〇部　高鷲亞鈍氏一〇部　石井白面人氏二〇部

武玉川四編研究（五）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(104) **佃へ捨にわたる目ぬくひ**

秋の屋＝當時眼病を治す呪が、佃島に有つたのではない歟。

東魚＝海邊に目やみの多い事は想像されるが、たゞそれ丈けから佃と置いたのを說明してしまふわけにもいかぬ。（前句で「佃」が適切なのかもしれないが。）

省二＝佃島と眼病の關係を明瞭にしたい、（傳染を慮つて、あゝいふ場所へ捨てに行つたとの說はあるが。）

秋の屋＝再考するに、昔は佃島の住吉神社に於て、毎年夏越の祓をするので、其時に流行眼を拭つた布帛を、海水に捨てると云ふのである。

(105) **年忘馬鹿に着たる馬鹿の面**

省二＝年忘には馬鹿騒ぎをするもの。そこで少し足らぬ男に、馬鹿の面を被ぶせて興がる。

秋の屋＝坐興に愚者を弄ぶのである。

東魚＝作りすぎた感がある。

(106) **二階から飛ふ夢の若さよ**

省二＝二階から飛ぶやうな冒險な夢は、若盛りでなくてはみられぬ。

秋の屋＝二階から飛ぶやうな夢で、飛ぶ態を夢にみたのではなからう。

東魚＝そんな突飛な夢を見るやうな若さよ、で、矢張り飛ぶ夢を見ると解したい。

(107) **不斷尾か出てしらぬ年の尾**

省二＝不斷から不始末なので、歳尾とな

つても同樣、暮の心配などもせぬ。爲し得ぬ程不斷尾が出てゐるのであらう。

秋の屋＝性質のよろしくない樂天家である

東魚＝赤字は駟ッこになつてゐる奴である。

(108) **雲林院てうまひ湯を呑み**

省二＝京、紫野に在り、昔は櫻の名所。うまい湯はお花見のものか。（名井でもあるとよいのだが。大德寺に屬せしといふ茶の湯に關係あるか。）

秋の屋＝櫻湯を呑むのであらう歟。茶の湯では無いと思ふ。

東魚＝花見時の渴を醫やしたと云ふ心持ちだけくみとればよい。それが雲林院で物靜さが感じられると思ふ。

(109) **胡葱の手のない中へ竈拂**

省二＝竈祓はカマ神を祭るため、十二月下旬に巫を招いたもの、胡葱膾に手をとられて、ゴテ〳〵と忙がしいところへ竈拂がくる。

秋の屋＝胡葱膾は三月四日に作つたものであるが、竈拂の時とは大いに違ふ。この句は「手のない」とある故、歳暮の句である。

東魚＝時節や場所は判つきりせぬが、兎に角家人がせわしく厨で立働いてゐる處へ、間のぬけたやうな竈拂がやつて來た處に可笑味がある。

省二＝秋翁說の如く、「あさつきの膾進ぜて猿轡」三月四日雛に供へて仕舞つたもの、膾は春の季となつて居る。「わすれめや胡葱膾浦小鯛」（牧笛）。五月九月にも竈拂が來たと歳時記にはあるが、やはり季が違ふ。

(110) **覗かるゝのを代脈の恥**

秋の屋＝代診を信頼せぬ家人が、病室の次の間から差覗くのを、窃かに恥づるとであらう。

東魚＝覗かれるなどは、輕くあつかはれた處である。

省二＝然り、代脈でも先生なのだから。「何ぞ聞かうかと代脈苦勞がり、」覗かれる位ですめば恥ぢどころか安堵なのだ。「唇なめて戻る代脈。」呵々

(111) **押へのロに言足らぬ寺**

秋の屋＝「押へ」は大名などの行列の最後につく供のことであるが、大名が寛永寺又は增上寺へ參詣する時は、休息する寺院の名を、供人一同に對して觸れるのを、詳かに言はなかつた、と云ふのであらう。

東魚＝解を得られない。

省二＝「後押殿を賣るかと思はれる」この如く、押が寺の名も觸れべきだのに、言足らなかつたのであらうか。

(112) **おろかな事て更る古御所**

秋の屋＝猿島の僞內裡に於て、平將門が軍議を凝らすので、それを「愚な事」と云つたのであらう。

東魚＝前說の如くであらう。

省二＝古御所に怪物が住むで居るなどと愚かな噂に更ける。

(113) **志賀てはさます雩の欲**

秋の屋＝「志賀」とは琵琶湖畔の辛崎のことで、此處の夜雨は八景の一であるから、請雨の念願が醒ると云ふのだと思ふ。

東魚＝夜雨を觀賞したい。一雨降つて呉れゝばと思ふのは、作物の取入れを目的とした慾の雨乞ではないとの意味。つまり物質慾からはなれた雨乞だと云ふのだ。

省二＝辛崎には夜雨はつきものなので、雩の欲求などしなくてもよい。

(114) **長枕夜着に仕懸はなかり鳧**

省二＝江戸時代に隨分家庭で用ひられた長枕は、一名夫婦枕といふ程で、何んだか仕掛けがありさうな氣がするから、夜着にも一處が、夜着は變りのない普通なのである。（大夜着といふものがありはする。）長枕の趣味を詠んだ句。

秋の屋＝長枕にも特に仕懸はないが、能く考へてみると、夜着よりも仕懸が有ると云はれる。

東魚＝長枕が味のあるものだから、夜着にも何にか普通と變つた處がありさうなと思はれるが——といふ心持ちと思ふ。

(115) **關守のうこかぬ顏に灯かとほり**

省二＝灯が點ほつて關守の顏に、一層威嚴がでる。

秋の屋＝昔の關所では燈火を點さなかつたと思ふが、（朝に門を開き夕に閉る故、）如何なる場合に灯を點すの歟。

東魚＝短日の灯をとぼしたのではあるまいか。（事實は知らぬが。）

(116) **氣に入たかとたゝく仲人**

省 **二**＝「暦で尻を叩く仲人」（武、一）

秋の屋＝この緣談は成就しさうだ。

東 **魚**＝氣の輕い仲人である。

(117) **御門より內は妾のたなこゝろ**

省 **二**＝邸內の事一切、妾の掌中にあり。

秋の屋＝傾國の美人恐るべし。

東 **魚**＝「御門より內」がよい。

(118) **いんきんに出す馬方の脈**

省 **二**＝馬方などは亂暴なものだのに、却て慰懃に脈をみて貰ふ。

秋の屋＝馬方船頭お乳の人と云ふけれども馬方は雲助などよりも木訥である。

東 **魚**＝平常脈などめつたに見て貰らつた事のない人物が恐る〳〵脈をみせてゐる趣が面白い。

(119) **恨くさ引つ付く程にかしこまり**

秋の屋＝「恨くさ」不明。妻が夫に對して、何か恨言を云ふ場合に、兩膝を固く合せて坐る、とでもいふの歟。

東 **魚**＝膝と膝がつく程、近く坐つて恨み言をいふ場面であらう。恨み草は恨言の意で恨の數々と云ふ位の心持ちと思ふ。「云ひ草」などと云ふ言葉もあるし、恨み種と置いてもよささうに思はれるから。

省 **二**＝恨種とも書く。恨のたねである。中七は引き近寄る事で、東魚氏說通り。

(120) **みとり子を旨く喰ふたる蚊を捕へ**

秋の屋＝嬰兒の顏手足などに止り、血を多く吸つた蚊を捕へる。

東 **魚**＝柔かな兒の肌を襲つた蚊は、親の身になると全くにくらしい、「旨く喰ふたる」に、オノレ此の奴めといふ心持ちが出てゐる

省 **二**＝蚊を殺し、と片づけた方がよい。

(121) **つふれ揚屋に飛梅の穴**

秋の屋＝「飛梅の穴」は、破障子の切張りで梅の花形を飛々に貼つたのでもある歟。正解下し難い。

東 **魚**＝愛人を慕つて逃亡した全盛が居らなくなつたので、遂にその關係の多い揚屋も沒落の運命に陷つたとでも云ふのではないか

省 **二**＝飛梅の穴が判然とせぬ。

秋の屋＝遊女が逃亡すると、その抱主は損失するけれども、揚屋には損失がなくて、沒落するはずがないと思ふ。

(122) **山伏のまたも怖きは女房也**

東 **魚**＝山伏に一度祈り伏せられた事のある女房が、又憑かれたが、ひどく山伏を怖れると云ふ意だと思ふ。

省 **二**＝贊

秋の屋＝贊

(123) **師走を啼て驚す鷺**

秋の屋＝速くも籠の鳥がなき初めて、春が近づいたのは宜いが、大晦日に迫つたのに驚かれる。

東 **魚**＝作爲は目立つが、この位はゆるされてよからう。

省 **二**＝鷺に大晦日はないだらうから。

(124) **藏と言れてくつとする聟**

秋の屋＝此の聟殿窃に金品を外へ持出したので、それ土藏といはれて、吃驚したのであらう。

東 **魚**＝新婚當時藏座敷に置かれた知人があるが、これも藏といふ言葉で、何か自分の事を噂してゐるのかと思つてギックリとなると云ふ——藏座敷住居の人物か。（秋翁說はやはり本道の解であらうが。）

省 **二**＝聟丈けにぐつとなる。

(125) **投出した貌新らしき角力取**

省 **二**＝新顏の勝星。

秋の屋＝得意の狀が想像される。

東 **魚**＝新顏といふより、面目一新した感じで、さう云つたのではないか。

(126) **兜巾の下の痒き新弟子**

省 **二**＝山伏が鉢卷した上に頂く冠り物。新弟子で馴れぬ爲に、頭に當る廻りが痒くなる。

秋の屋＝兜巾の鉢卷した上に被る歟。これは元來頭巾の類であるから、頭上に直接に被るものと私は思ふ。

東 **魚**＝兜巾は直カに額上に戴いてゐると思ふ。だから馴れぬうちは痒いやうな氣がしてならない。眼鏡の掛け初めに目と鼻の間が痒くて仕方がない、それと同じ。面白い句と思ふ。

省 **二**＝兜巾には色々の變遷がある。手近の辭典を見ると、「大言海」には、「額上ニ置キ紐ニテ頤ニ約ス」で、鉢卷の事は書いてない。「近松語彙」には「山伏が鉢卷をして額に當てるものである云々」と。「言泉」には「布にて造り山伏の頭に鉢卷したる上に戴き紐にて云々」とある。いづれ機會に詳しく調べてみる。

(127) **薙刀は双物の中の女形**

省 **二**＝薙刀は女形、槍は男形と大體區別づく。

秋の屋＝武藏坊辨慶が持つと、全く荒事師と云へる。

東 **魚**＝知盛の幽靈だつて薙刀を振廻はすが、女で槍を持つたのはないやうだから、先づ薙刀は女のものらしく思はれる處からの機智的の句。

武玉川四編研究正誤表（一九四號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
二	一	七	神が	の
二	三	五	易柄	林
二	三	三四	懸念	取
二	四	四	寄拔	奇
二	四	二七	行く	人
三	一	一四	其も	夏
三	二	八	棕梠	樓（原本）
三	二	一〇	〇梠	樓

あらゆる趣味のお稽古場
松坂倶樂部
手はじきから奥義まで氣輕く、樂しく、御上達
會員募集
お稽古目
長磐常清小鳴
唄津元物
箏尺舞謠能樂
八曲踊曲鼓小
ピアノ聲書日茶本
樂道道畵
華料洋俳川
理道句柳
氣棋
學道
松坂レコード込所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
電話（表代）三〇〇三番
松坂屋
大阪日本橋

近作柳樽

麻生路郎選

痴友竹ちやん重工業界に乗出す
三人に職長もあり規則厳　福知山　小畑自由朗
煙突に今日の安否をたしかめる　同
愚友眞砂パパさんに變化す
この嬉しさ放送局よ知らんのか　同
今日からはパパだ子なしが馬鹿に見え　同
産婆からまづ父さんの名を呼ばれ　同
三日目の兒へもう月給取りに　はさはさはぜん　同
Y友清彦畵伯結婚す
スランプとはつまりお嫁がほしかつた　同
サラリーを訪問家庭の設計圖　同
花嫁もやつぱりいびきかくと知り　同
僕ガス會社をやめた
二十年の椅子へ痔の氣を殘しとき　同
鐘だけは撞いて和尚の冬ごもり　同
のたうつを働いてると自惚れる　朝鮮　高原懸源太
大昔マッチなんかはなかつたよ　同
蕾が蕾がと春を見付けたり　同
うらやまし二食でゆける生活を　同
シミがみな支那地圖に見ゆ氣の若さ　同
永住をする氣田を買ひ山を買ひ　同
甥
腰辨になれと校門押し出され　同
淺間丸事件
ほろ苦いお茶を船長呑み續け　同
南から春をはこんで鶴が來る　同
地下足袋の弱さ大臣御存知か　同
歎けごも及ばずとは坊主ぬかしたり　朝鮮　村野東狂子
皺苦茶の皮膚へ悲壯な白毛染　同
靴下のいらない夏よ早く來い　同
借智慧でした統制の態ア見ろ　同
明日知れぬ命へ買ひ溜賣惜み　同
買占めた庫をあばけぬわけがあり　同
動かれぬ統制法規三百余　同
だが然し政府方針丈けは述べ　同
戰友は愛馬は白衣物案じ　大津陸軍病院　酒井美知夫
病院船にて
戰つた山がかすかに波に消へ　同
内地近づく
白衣着て故郷へ歸る日をおそれ　同
代筆の看護婦さんも笑うて居　同
台灣の陸軍病院にて
台灣はいゝなと椰子の下に居る　同
戰線を想ふ煙草がほろにがし　同
とし若い軍醫野線のことをもきゝ　同
下馬評の主はカメラへ笑つてる　廣島縣竹原町　梶川芳郎
救かつた中へ船長の名が見えぬ　同
告別のラッパこぶしで涙ふく　同
天才と見えたは親の慾目なり　同
天才の喉が邪道へ走らせる　同
何もかも闇取引の世とはなり　同
失敬とすまして急ぐハイヒール　同
ダイナミック貧乏人の音でなし　京都　平岡としを
武運長久それからもうかります樣に　同
ビルマンも嬉しくぬれた今日の雨　同
體位向上溫泉でのびて居る　同
青春の記念に戀もしてみたし　同
男産みにはこり程のさわぎやう　同
僕が坐はれば新妻も來て坐り　廣島　大森風來子
統制下の新居獨身見給まふな　同

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一聯手一投足を此展望でずばかる樣にしたい皆樣の御通信を歓迎する（係）

催

▲川柳雜誌社句會（三月二日）▼松坂倶樂部川柳講座（三日、十七日午後一時）▼有恒川柳會（十四日、廿八日夜）▼佳友金屬鋼業親友會（十五日）▼坂田オフイス川柳會（廿五日）▼阪大川柳會長崎柳秀還暦祝賀句會（廿六日）

消息

▼大坂形水君（不朽洞會員）は十有七年間勤續の樋口商店を勇退し、大阪市西區奥美町一〇番地へ羅紗製品卸商を獨立開業された。發展を祈る。

▼田中雨月君（不朽洞會員）の令息が三月廿二日甲子園ホテルで結婚式を擧げられ同夜同ホテルで華やかな結婚披露宴が開かれた。川柳人では麻生路郎、寺井鋭々、松垣勝太郎君等の顔が見へた。

▼戸倉普天君（不朽洞會員）の令息が四月一日に結婚されることとなつた。およろこび申上げる

▼池田哀史君（中支）「生きてるしようこ便りをふつと出そ」の句を寄せられた。戰線で「川柳しなの」や「四ッ橋」を手にして、川柳の人情味を滿喫したとのこと。

▼北山悟郎君（大阪）の令息明君が北支から歓喜嬉といふ號で「小孫の笑顔の上の日章旗」といふ句を送つて來たそうだ。

▼酒井駒人君（東京）は久しく生活に惠ぐまれなかつたが漸く安定が出來たので又川柳に複活すると云つて來た。

▼渡邊曉童君は健康回復、三月二十日松山市三番町大阪時事新報松山支局販賣主任として赴任された由、發展を祈る。

▼戸倉普天君（兵庫縣）は日本スフ織物工業組合聯合會大阪出張所の仕事と日本織物樹脂加工同業會の仕事をされることとなつた。

▼丸尾潮花君の結婚披露句會が

松坂倶樂部麻生路郎川柳講座の人々

向つて右より——人面白井石・天普倉戸・路丹村奥
郎路生麻・庵々生島中・篷郎田戸・子根美出川

春や春ごのネクタイも氣にいらず　同
眼鏡を取るこ秀才の顔でなし　同
何處でくずそう一枚の紙幣　同
娘もう惚けるここも言へて嫁き　西野みづほ
何がため生るのか今日も藥飲む　廣島縣竹原町　同
以下次號まだ診察の順が來ず　同
咲く花へ遠く今年も寢て暮し　同
靜臥椅子銃後の民こ思へごも　同
一億の一人であれご藥瓶　同
停電へ慌てゝ踏んだマッチ箱　同
何處折つても鹿の角じみるいちばくの木　松山　山本耕一路
尺獲虫メートルになるこなるまいこ　同
餘り哀しくアルヴエスサタン詩集閉づ　同
目藥へ必要の無い口を開け　同
寢返りをすれば箪笥のカンへ向き　同
流行歌琴で彈いてる末娘　大阪　平川久枝
引受けて呉れた男の爪の垢　同
電髮へまつすぐに來る冬の風　同

紀元二千六百年

皇禮砲白水仙がちよつこゆれ　同
見合ひだこ感づいてゐる裾さばき　同
神樣になりたいやうな入試前　廣島　山縣久子
思ひ出の丘まん丸い月がほし　同
妹の齒痛春の見える窓　同
春の柄母の好みをいれて買ひ　同
バスガールがさ〳〵の手で釣を呉れ　同
故郷から特製こ云ふ竹輪が來　廣島　清田田鶴子
人の好い母はなんでもお裾分け　同
オールドミスのあつかましさで干渉し　同
出征の見送りコートが派手すぎる　同
ぜんざいへ統制の手が伸びるこは　同
停年に落つく故郷は雪深し　長野縣　高峰柳兒
あね藝者おごる弱身を嬉しがり　同
嘘言つてまこもな子等の瞳を恐れ　同
霜燒の兒が內職の膝ですね　同
小兒科の次にうつつた子を背負ひ　同
洒々落々ごうにかなるこ月を起し　松山　芝田靈子
春淺き夢の途切れへ坊や泣く　同
熟練の子供の獨樂も面白し　同
眼鏡ふく爲に襦袢の袖を出し　同
旅愁仄かに港牛乳色に明け　同
いつの間に軍歌になつた送別會　名古屋　鈴木可香
鐵兜戰死覺悟の面構へ　同
鐵兜南支の光照り返し　同
大君の子こいふ姿鐵兜　同
指輪冷たく春の夢を吸ふ　兵庫縣　森本秋子
待ち合ひ所バネの出てゐる椅子へかけ　同
お忍びの樣に新婚街へ出る　同
山彦に心の弱さ笑はれる　同
改まる禮へ中身がこそばゆし　廣島市　近藤須彌浩
御無心が言へなくなつた勝將棋　同
鬼ケ島まではゆかぬにもう寢入り　同
雨宿り戀になるこは知らなんだ　同
眞直な串に魚は反らされる　愛媛縣大洲町　米澤曉明
開業へ自信を見せた主人の眼　同
事務机先づ彼の女への便して　同
本店はさびれた城下町にあり　同
長い貨車數へ終れば雲雀鳴いてゐた　大阪　近藤龍成
添うて十年酒落の說明が要る女房　同
恩情に叛き軍需へ走り去る　同
見せ合へば課長も同じ懷爐なり　同
病み上り鯉のはねたを嬉しがり　廣島　石原伯峯
娘十六夕燒けの空さへ悲し　同
自殺してみせるこ言つた友が逝き　同
假病こは知らず御見舞屆けられ　同
子の遊ぶここに乞食の眞似もあり　大阪　加藤ライト
氣まぐれな心易者へ手をひろげ　同

大阪市電急行實施

傘さして急行時間けなすなり　同
十圓へ車掌鞄を輕くする　同
二重窓こほす日ざしも春めきて　海拉爾　小川靜觀堂
やがてまた濁つた春の水だらう　同
御下賜品おもひおもひに小包す　同

歐洲戰爭

戰況が刻々かはるくちいくさ　同
石積んだ馬のひづめも春の音　大阪　山本葉光
春や春學校も新聞廣告し　同
手に職があつて貯金は出來てゐず　同
片戀でなかつたけれご浮世なり　同
遺り繰りの自信もついて所帶染み　ホノルル　前山北海

三月九日夜、鈍足會川柳部の柳友によつて開催された。

▼北川春巢君(大阪)は公務出張で潮岬の絶景を賞し「珍客へ太平洋は風いで見せ」の句を寄せられた。

▼福田山雨樓君(横濱)は公務で九州方面へ出張、歸途三月十六日午後、川柳雜誌社訪問、路郎主幹並に奥村丹路君と歡談、夜は路郎主幹と永田里十九君を訪問、同夜歸東された。

▼高鷲亜鈍君(大阪)の隨想集「詩人複眼」の出版記念會が三月十七日午後五時から北濱のグルマンで開催された、出席者三十餘名頗ぶる盛會であつた。

慶弔

▼夷一笑君(大阪)は二月二十四日結婚式を擧げられた▼近年まで名古屋柳界に於て活躍されてゐた大窪文芳君は鄕里松山に於て二月二十八日朝永眠せられた悼む。

▼川出美根子女史母堂すゑ刀自(兵庫縣)は二月二十八日死去された謹んで悼む。

▼樽井翠花君(大阪)は一月十四日華燭の典を擧げられた。

▼番傘川柳社の重鎭、木村小太郎君(大阪府)が急性肺炎のため三月十五日午後八時十分、阪大石橋分院に於て長逝された。謹んで悼む。

轉居

▲貞永代志久君は山口縣厚狹郡船木町へ▼森田文福君は下關市長崎町東方司有馬龜助樣方へ▼大森風來子君は廣島市東雲町五七〇へ▼松本雪舟君は山口縣熊本郡田布施町へ▼大阪形水君は大阪市西區奥美町一〇番地へ▼高鷲亜鈍君は南海本線諏訪の森藤村方へ▼石崎柳石君は廣島市三川町二七番地へ▼上田大溪水君は大阪市此花區九條上通一ノ四〇へ

★本社

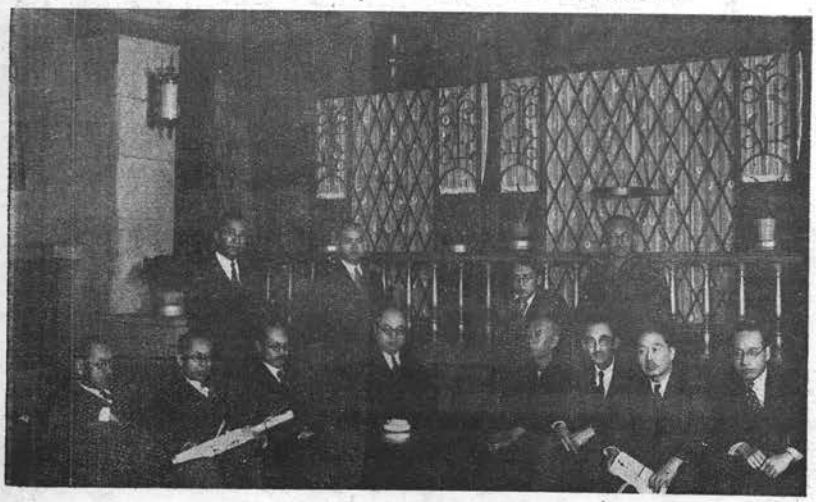
▼支部の異動

○布哇支部新設(ホノルル)幹事は古川魔花麗君擔當。

○竹原支部幹事交迭　黑木芳泉君任期滿了のため、

有恒川柳會の人々

三行川小•遊五山白•月雨中田•可志瀨高•瑠蕪至岡藤——りよ右てつ向
一鄂澤大•二跳川立•二德岡稻•造夢波木橋(列後)三平佐平•々銳井寺•郎路生麻



お祖母さん孫の英語を淋しがり　同
誤まつた白人かぶれ髪を染め　同
構内に吉野の櫻派手に見せ　大阪　朝野光路
米二升買ふに米屋を說きふせる　同
春の陽へ炭豆炭の苦を忘れ　同
トーチカの銃眼からも春が見え　北支　月原宵明
一片の悔なく外套枕にす　同
煖爐よく燃え古兵殿のローマンス　同
迷い子の放送デパート繁昌も　岡山　鈴木九坡
「改造」を一冊持つて風を切り　同
女いま別離の曲を彈いてゐる　同
義理堅い性分で金貯らない　大阪　富岡巨人
融通の効かぬ男へ感謝狀　同
村長の威嚴もあはれ猿に似て　同
何處までが男の意地か生きて見る　東京　池澤丈雄
あんな女と思ふ女が他になし　同
捨てられぬ内に捨てるが戀の勝　同
雄辯な妻となりきる物價高　大阪　米谷松太樓
かぢりつき主義で表彰されてゐる　同
喰ふ爲めの闇取引を御存知か　同
氣の乘らぬ夜店でかくも押されたり　東京　田中靑風
燈明をあげる女房に匂ふ髷　同
首筋を近頃たゝく父の齡　同
木炭車寄せ屋のやうな荷も積んで　尼崎　山田南濃路
惡友と乘る自動車は映畵めき　同
花嫁の自動車靈柩車に拔かれ　同
これしきの地震跳足を笑はれる　瀨戸　佐藤叫史
激戰のあとへ咲かせる山櫻　同
恩人の其の後は芝居めいてくる　同
結婚は恐しいもの嫁き戻り　高知　岩原風味
名人と一字違ひの一座が來　同
又値上げ給料丈けは九、一八　同
居候階下の節米論をきゝ　蘆島縣竹原町　杉原愛鳩
つゝましく欠伸をしてる女秘書　同
氣兼なく舊師と飲める年になり　同
卒業は自己の努力とのみ思ひ　尼崎　小林文月
卒業をしてから歩きかたも變り　同
入營の朝小鳥にも餌をやり　同
薄情と云はれ無口は默しかね　下關　中村九呂平
雪の夜格子に誘惑持つて來る　同
ボン〳〵も勤勞奉仕する銃後　大阪　上山よしみ
現金で頭を下げて買うて來る　同
嫁ぐ氣になれづ女の二十八　大阪　河内明子
詩集ふとひらけば胸に祕めた文字　同
友人をたよるつもりの荷を纏め　大阪　今西湖秋
更生を誓ひ男の別れする　同
終點を出た眼に低い春霞　兵庫縣　岩崎水虹
讃美歌を覺えただけの女學校　同
報國の一念凝つたスフなのに　福岡縣甘木町　大西洋
一にスフ二に南京虫もて余し　同
一仙を拾ひほゝ笑む我を恥ぢ　ホノルル　古川風竹
ガラス鉢金魚オレよりいい世界　同
軍刀を床に飾つてまだ征かず　奈良縣龍田町　嶋田翠峯
母親の輕い鼾も有難し　同
局も局新年狀に不足稅　大牟田　高田抱逸
「先づ保健」春が銃後へ呼びかける　同
藥束を斬つて軍刀試してる　大阪　山川富士
日本刀坐り直してほめている　同
珠數もつてこん〳〵と深き夢に入り　尼崎　奥田綠翠
煙草の輪の中に嘘ついた女ゐる　同
兎も角も軍需景氣の端に立ち　京都　八田鐘生
珠數の在處の知れぬ淋しさ　同
春雨に素足の舞妓やつて來る　松山　岡田蜃氣樓
友情も規定の前に無情なり　同
夜店客易者の方へみなとられ　下關　岩崎松翁
儲けたか人の出入りが多くなり　同
忠告へ我が娘に限りそんな事　布哇　長谷川猿吉
排日の空氣の中に嚴とゐる　同
肩書の長々しくも平社員　大阪　藤森小雅子
思ひ出は或る日異人に物云はれ　同

故郷を訪ねて

我が住みし跡は埋れた桑の畑　松本　西藤義春
コンバクト出して應接待つてゐる　下關　上山晩成
階段を大きく登る停電日　大阪　佐々木指洋
愛人と足を並べた川堤　大阪　梅田秀溪
葉櫻の丘をさつきのバスがゆく　大阪　靑野笑門
ローヴウエイヴパーマネントを女にし　尼崎　江口正路
掃除した部屋へ退院迎へられ　名古屋　長谷川可門
聖戰を知るや知らずや釣を垂れ　大阪　中西彌生
共稼ぎ炊事する日もあつてよし　島根縣　吉田孤舟
日本は强し三月十日あり　山西　松尾小女郎
珠數を取り母は供養の灯へだまり　大阪　田所一水

梶川芳郎君が新幹事に推薦された。

○廣島支部幹事交迭

濱田久米雄君幹事辭任、後任は大森風來子君が擔任されることとなつた。

▼左記の諸君が不朽洞會に入會された

嶋知山　小畑自由朗君
大阪　中原銃人君
廣島　濱田久米雄君
大阪　好崎申仙君
同　杉原大研子君
同　菊澤小松園君
同　魚住滿潮君
同　岩本雀踊子君
同　清水友帆君
同　松井丹坊君
同　石野秀雄君
同　清水史路君
同　清水白柳子君

▼本社事業部の新陣容を左の如く決定

事業部長　水谷鮎美
永田里十九
田中風葉
好崎申仙
奥村丹路
丸尾潮花
中原銃人

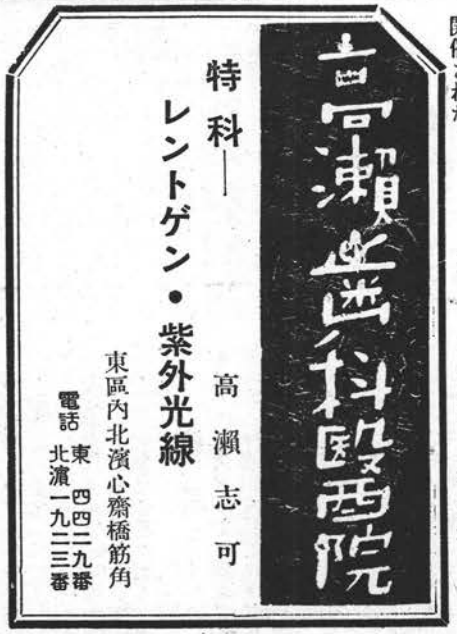
▼左記は本社營業部員として三月五日採用。

樋口きみゑ

▼本社編輯會議が三月十日午後より、不朽洞階上に於て開かれた出席者は路郎夫妻、丹路、豆秋、某人、水客、潮花、紫香の諸君。なほ同夜引續き月評會が開催された。

（三頁より續き）

り口に注ぎかける。かくして一樹毎に切り廻るのである……豐橋市附近の年切は更に大仕掛であつて、節分の朝その年に結實せぬ果樹を荒繩で縛り置き、夕刻になると主人が是等の樹を伐り倒すと罵りつゝ、斧や鋸などを持出して立ち騷ぐのを、豫て依賴しある者が來て、來年からは必ず結實するを以て、平に今年丈けはと詫びるも中々に肯き入れず、幹に疵をつける程の意氣込をみせ、後漸く詫びを容れて荒繩を解くのである」云々。實りますなりますと云つて、鬼の面を被つた者が逃げ出すところもある。（以下次號）



柳川

二千六百年史（四）

戸田孤篷

徳川時代（二）

○蘭英との通商を許す（一二六九—一二七三）

信長の時毛唐は神妙にしてゐた。秀吉から家康にかけてそろ〳〵本根を吐き出した。そこでキリストス教に對する彈壓が始まつた。然し人生の表裏。西班牙葡萄牙に遲れて立つた蘭英の中傷の興へた効果も見逃がせぬ。

算盤で來れば握手も斷れず
侵略史三浦安針讀んでくれ
日本がツブ〳〵の世界地圖

○大阪陣（一二七四—一二七五）

治安維持と云ふ點から云へば此時代の大阪方は危險な存在であつた。只「國家安康」なんか持ち出して事を荒立てる材料にした事に批難が存する

緋おどしを着ると秀頼着綱り
御武運の末忍術も見破られ

○渡海洋書の禁（一二九〇—一三九四）

鎖國の第一歩。船板一枚下は地獄と云ふ思想もこの邊から

とにかくもめんないさしてほつとする
繪馬堂の末次船もはずされる
笄の座は覺悟洋書は手離せず
長政の末路は風にきくばかり

○島原の亂（一二九八）

信長は一向宗に惱み、家光は切支丹に苦しめられた。生死の問題を解決した連中と戰つてみて益々宗教の恐ろしさを感じた事だらう。

拜まれる事に天草四郎慣れ
昇天を樂しむ敵をもてあまし

○鎖國（一二九九）

可否論のある所。進取性を奪つたと云ふのが否なりとする説で、明治の强烈な對外的刺激に抵抗する丈けの內在的要素を蓄積したとみるのが可とする説

オランダの旗一本になる出島
本領安堵マリアの像を押しかくし
異教徒に無之候と先づかゝれ

○大日本史編纂（一三一七）

德川御三家のうちから勤皇の芽が出たのも御時代、光圀の修史事業は明治維新の一大基礎を形成し、又その續編續編で一通の完結を見たのが明治時代の事である。

考證の燭が光圀の頰でゆれ
獅子心中日本學と云ふが出來
嗚呼忠臣楠氏の墓へ松の風
助さんと格さん歴史の話する

○赤穗義士（一三六一—一三六二）

忠臣蔵をやれば小屋物は超滿員だ。仇討の苦心には理解出來ても大石良雄流の戰術を以つて外交に政治に眞似をした日本人はどれだけ居るだらう。

大名の世界に上野介が居り
早打に菜種の花が踏みつぶれ
愈々となり足輕もなかにゐる

○新井白石（一三二六—一三八五）

國民經濟なんて事がそろ〳〵話題に上る。元祿財政難のあとを受けて政治に經濟にどしどし新政策を實行していつた。朝鮮使節の接待の過重を警め街道の賦課を輕減したり、金流出防止の爲め輸入に制限を加へたりした。

苦學とはこうするものと水を浴び
入超で長崎奉行叱られる
助郷の惱みを一つへしてやり

○吉宗（一三四三—一三三一）

享保時代は德川中興の健實な所謂デフレーション時代。統制につぐ統制でその點今日とよく似てゐる。基督教以外の洋書は解禁になつた。

解剖圖見ると腑分けがしたくなり
綿服を笑つて居れぬ奥女中
孝行の眞似も忠相ほめてやり
盛衰のグラフ吉宗太く引き

○竹內式部（一三七一—一三四一七）

名前だけきけば女かと思ふが脛毛の生えた竹內式部は、德川も十代もたつたんだからもう亡びるよなどと豫言したり、その信念でお公鄕さんを說いてまわつたもんだから早速幕府のブラックリストにのり、とう〳〵つかまつて八丈島へ送られたが途中で沒した。

うなづける豫言へ捕吏が飛んでくる
一石を投げた本土は薄れゆく

○山縣大貳（一三八四—一四二七）

式部の同志で警察官。この時分の警官には大塩平八郎なんて手强いのが居り、實行力のない學問など糞喰へとハラ〳〵する樣な言動を敢てした。しかし竹內といひ山縣と云ひ尊皇論の生みの親であつた。

與力から儒者そのつぎは獄門
あつけなく尊皇論の芽はつまれ

○松平定信（一四一一—一四八九）

こゝまで來ると幕府も左前。モラトリアムをやつたり、泥繩式の國防をはじめたり、いたずらに落首の材料を提供する。

棒引と云ふ策もある經濟書
大奥で今日も落首の噂する
樂翁公ほつておけないのが淋し

○林子平（一三九一—一四五三）

出る杭は出たれる。日蓮の立正安國論も、林子平の海國兵談も誇大妄想狂ではなかつたのだ

ほんとうの事はきゝたくない幕府
六無齋今夜の夢も世界地圖
地球儀へせめて惡童よせあつめ

○芭蕉（一四五七—一五一八）

萬葉からはじまつた三十一文字は上の句を發句とする連歌になり、俳諧になつた。松尾芭蕉は形式にも內容にもこの短詩へ生命のいぶきを吹きこんだ最初の人である。

今日ひと日奥の細道何と書こ

○川柳（一三七七—一四五〇）

旅人芭蕉に對する江戸兒八右衛門柄井川柳は俳諧の前句附から市井茶飯事の內に詩を發見し可有編するところの柳樽が生れた。

江戸住ひ月雪花になり切れず

○北邊騷波（一四五八頃）

間宮林藏、近藤重藏、高田屋嘉兵衛などの豪傑が雪の唐松の林で黑とつ組合ひを始めた。

もう雪に卷いてロシヤ語も少し出來

○伊能忠敬（一四〇四—一四七八）

燃える雄途を胸底に秘めてしかない醬油造りに殆んど全生涯をかたむけ晩年に至つてようやく笈を負ふて測地の術をおさめ見馴れた型の日本地圖を作り上げた最初の人。

天下晴れさあ六十の手習ひだ
測量をしては書き込む旅日記

○本居宣長（一三九〇—一四六一）

中學四五年になると習つた英語で日記もつけてみたいと云ふもの、祝詞から、古事記、萬葉と日本精神探求者によつて擬古文なんてしろものが試みられたのも此時代

只一夜習つて古事記傳となり
燭を切るつひて鈴にもふれてみる

○高山彦九郎（一四〇九—一四五三）

橋上の泥に伏して皇居を拜するのを口の惡い京童は何か云つたにちがひない。尊皇も大分大衆化して來た。

橋詰に來て彦九郎下駄をぬぎ

○頼山陽（一四三九—一四九二）

日本史を書いた詩人。德川時代のバックの下に書いて裕に永遠性がある。史實よりも史論の取扱方に興味がある。

外史氏曰く少々は嘘もあり
もう溜れぬ版木をもつて書肆がくる

○太平記讀み（一四五〇頃）

戰爭や對外活動にすりへらされるエネルギーが內に向つて學藝は町人の間に弘まつた。大義名分が巷にまで浸んでゆく。

肩越しに太平記讀み覗かれる

○近松文左衛門（一三一二—一三八四）

大衆が本を讀む一方芝居をも見る樣になつた。時代ものゝ他にトピックをニュースを取扱つた世話物が登場して時好に投じた。偉大な藝術によつてのみ身近に永遠性を見出す事が出來る

際物が際物でない巢林子
巢林子ある日心中がしたくなり
もう噎消えて淨るりだけ殘り

○廣重（一四五七—一五一八）

大和畫南畫北畫、それに洋畫を加へて混然一體となつた所に浮世繪の風景畫が產れた。西洋の影で名をなした北齋廣重の作品が再び海を渡つて印象派の源泉となつた事は愉快を禁じ得ない。

日本橋描いて廣重旅に出る
遠近法不思議がらずに遣ひ馴れ
セザンヌの壁に廣重張つてある

○ペルリ來朝（一五〇六）

割切れない不安の最中に江戸の鼻先へ黑船がやつて來て祝砲をぶつぱなしたからたまらない大砲の格好に見えれば釣鐘でもころがして來てあつちむけた。

黑船の魅力に少女お吉居る
握手する井伊大老の手が震え

○夢物語り（一五〇〇頃）

華山、象山、長英等の頭には いち早く新思想をつかまへて、德川時代に居る事を否定したかつた。思つた事を一人で包んで置けずに。

正夢のつもりで書けば縛られる
エレキなど試めせばバテレンだといはれ

○安政大獄（一五一八）

尊皇だ攘夷だ、佐幕だ、喧々囂々治安維持の幕府が大彈壓を下して「靜まれ」と一喝したわけだが、檢擧の網にかゝつたのが一つぶよりのかけがへのない大物そろひでは一寸と淋しくなる。

雜草を肥すにしては貴い血
この若さそれで幕府を怖らせ
牢番が絶筆の詩を托される

フルーラーパツール

點又京町須美惠電市

フルーラーパツール吉百八

★日本柳壇百人撰★

2599年の金字塔 自選一句

ABC順

醉うて寢て居てもスパイはスパイなり　東京　阿部佐保蘭
敵前上陸僕はふじみにて候　大阪　麻生路郎
統制々々だまつて日向見てゐたり　大阪　麻生葭乃
泣いてゐる番が胸毛に觸れてゐる　京都　塲桑岳
母の瞳の凱旋せよと子を送り　静岡　榎田竹林
奉公に馴れたか手紙遠ざかり　静岡　榎田柳葉女
日輪と化して皇軍輝けり　東京　富士野鞍馬
剃つた顔軍馬に一度見てもらひ　京都　藤本蘭華
乏しきを乏しと知た子の無口　東京　古谷盈光
懐しき哉お隣りの朝の煙　青森縣　後藤蝶五郎
夜櫻が百燭光に負けて散り　大阪　後藤青兒
貧乏にゐて童心を大事がり　廣島　濱田久米雄
手揃ひのどんどと賣れるおもしろさ　名古屋　長谷川鮮山
飯櫃を二人でゆづり合つて喰ひ　大阪　橋本綠雨
着膨れた兒の眸に凧がよく揚がり　東京　堀口祐助
親子三人五衛門風呂の湯氣の中　大阪　姫田夕鐘
電扇の死角で蠅はさんざめく　北京　石原青龍刀
風邪おして出る父親の父らしさ　仁川府　池田可宵

京都にて

ちらりほらり人が歩いてゐる京都　山口縣　磯部孔雀
インテリのくやしけれども兵は兵　大阪　市塲沒食子
たのしみはふえずとも灯がはひる家　松本　石曾根民郎
日本に松あり二重橋の景　今治　石崎柳石
藏の白壁が怠けてゐる日向　横濱　磯部天邪鬼
鯛の鯛今日はわたしの誕生日　張家口　岩崎柳路
かゝる世の頭となりて街に行く　西宮　岩崎蟬吉
この貧しさが淨土へつゞく道だろか　長野縣　金井有爲郎
足し前がでかい金一封を飲み　上田　金子呑風
旅順踏む足勿體なや地下に骨　東京　川上三太郎
珈琲に寐つかれぬ夜もあつて冬　東京　河柳雨吉
氣樂げに甕の湯槽で兵唄ふ　東京　加波澤默六
松活ける娘の手のまろみ春待つ手　大阪　河野夜王
いゝ屋號よしある人の小料理屋　大阪　岸本水府
從業員募集に資本金も書き　大阪　北川春巣
役人は軍需景氣をそねむだけ　青森　小林不浪人
万の寄附金を新聞小さく書き　布施　小西落子
故郷よし氏神があり親があり　松山　前田五健
牛乳屋病狀きいてどうする氣　山口縣　三原狂路
子の寢顔父よしつかりせよといふ　青森　宮本夢一文
姑娘よ日本は花も咲くところ　出征　宮岡白峯
不惑過ぐ相貌いまだ哀れなり　東京　三浦太郎丸
泥は水に似てはるかなる地平線　兵庫縣　水谷鮎美
戰爭に立塲を替へて牧師說き　大阪　森雞牛子
昇給に感激もなく老を知り　東京　森井荷十
萬分の一を果せと只祈り　大連　森崎佛心
枯れかゝるのを素人は水で攻め　今治　長野文庫
四十年代り變らぬ友と酌み　高知　中澤濁水
卷鮨の中味のないは母が喰べ　兵庫縣　長崎柳秀
六十に近きを忘れ得で坐る　長野縣　中島紫痴郎
戰線を思へば七分搗白し　静岡　落合樂瓢
軍器不當洮南站の土ほこり　新京　大井正夫
酒飲まぬ日ありはりきりした銃後　大阪　小田夢路
旅がらす一應驛をまともに出　大阪　岡田某人
勞作に無名作家の雲脂ばかり　東京　村田周魚
ビルを脊に陽はこゝになり靴磨　大阪　奥村丹路
御召艦その背景に富士の山　大阪　近江砂人
川水もやうやく昏くちるさくら　京都　大島黃子朗
天皇の赤子の名こそ有難し　京都　大島無冠王
キッチリと座る己の虛の形ち　新京　大島濤明
大悲慈の口からうけて岩淸水　松山　芝田靈子
子の寫眞汗に濡れてるまゝ笑ひ　出征　酒井美知夫
寢た母がまた起きて來た探し物　東京　齋藤丹三郎
氣も輕るく身も輕るく春の宵を出る　神戸　坂本柿亭
遣された者の夕餉が直ぐにすみ　大連　三條東洋鬼
戰場へつゞく砲、戰車、赤ン坊　奈良縣　佐々木三福
迷ひ犬ただうろたへてみたりけり　浦和　島田翠峯
秋風に追はるゝ人のうしろつき　大阪　清水美江
モンペイのバケツ一杯よう提げず　名古屋　須崎豆秋
兵古帶になつて住職花を活け　大阪　鈴木可香
放し飼ひヒヨコを叱り子を叱り　大阪　妹尾八九滿
自爆する僚機へ尊い擧手の禮　大連　高橋月南
雛祭り報らした顔が皆揃ひ　大阪　高橋かほる
死んで來る覺悟の前の高笑ひ　秋田縣　田澤有石
大陸に適わぬあばら骨をなで　長野縣　高峰柳兒
母の瞳へ考へて來た嘘が出ず　大連　高須啞三味
男甲斐今宵も嘘をついて出る　布哇　高澤一浪
中元を廢めるに惱む氣の弱さ　台北　塚越正光
十二月三十一日眠くなる　高知　筒井水魚
陳情はドアーまで來て讓り合ひ　大阪　上田朴堂
死ぬ程の事を他人は笑つてる　八幡　上野十七八
昇天の雲滴れば元の水　北京　和田默然人
ふるきたらいにあとをとりむすこうまれけり　今治　渡邊曉童
煙袋を咥へ我的は不關事　撫順　山下岸柳
妻の稚氣愛すべくして汁粉の夜　松山　矢野虻の磨
晝さわぐ鼠の下の陶枕　金澤　安川久留美
鐵道も一本線は淋しいね　名古屋　吉田水車

「日本柳壇百人撰」が川柳人協會に移管されてから第二回の發表である。既報の如く協會の年中行事、同情週間川柳大會の記事並びに會報と同時の發表では誌面が容さないので、古豪新進の百人撰は毎年四月號に發表する事と改めたのである。前年度と比較して見るに古豪は更に揺がないが中堅に於て稍、姿を沒した人々が尠くない。その間隙に乘じて新進の擡頭大いに見るべきものがある。百人の回答に接しなかつたことは聖戰下の多忙で作句揮はず、良心的に回答を遠慮されたのと旅行其の他の支障によるものと思はれる。

★映畫に川柳を觀る★

ロビンフッドの冒險

ワーナーの天然色映畫

ロビンフッドの冒險

ワーナーが今賣り出しのエロール・フリンを主役にトーキー「ロビンフッド」を製作した。トーキーで音を獲得した映畫は今日又も色の世界を征服したが只錆も澁味もない綺麗すぎる色彩にはまだ倦き足らぬものがある。

ロビンフッドの背景となる中世のコスチュームの美しさ。先に封切られた總天然色の現代物「翼の人々」を見てゐないので比較出來ないが躍動する繪畫美と云ふ點からこの一作は成功してゐる。(三月十二日試寫を觀て)

戸田孤篷

正義派の征矢に獄卒又倒れ
卷き上げたのを卷き上げる人礫

川・協

▼西日本鐵道川柳大會は既報の如く三月三日下關驛前鐵道倶樂部に於て開催され五十餘名の參會者で頗ぶる盛會であつた、本誌第一頁寫眞參照、以下說明——向つて右より)

第一列春巢、米三、秋史、久米雄、某人、晴朗、華秀、琴月、十七八、白海、南泉

第二列文福、苦笑、みのる、風來子、不川、のぼる、草路、桃水、御堂、默笑、禾乃、

第三列無名子、半休、市多樓、はつみ、潮流、白陽子、きくの、ふみ江、恐錢、水鳴、一旦、不二翁、楓紅、素子夢

第四列松翁、光輝、蘭京、川平、番作、不水、樂蓮坊、暢鈴、柳月、代志久、山彦、藤一、九呂平、賢次

▼市川市吉田醫院に入院中の柳界の耆宿、坂井久良伎翁(川協名譽會員)は三月上旬、腸疾患に衰弱加はり一時重態を傳へられ知友間に暗雲を感ぜしめたが、その後小康狀態にある由只管全快を祈る

▼川柳きやり吟社、東京)では四月三日神田明神境內長生殿に於て創刊二十周年祝賀句莚を開催されることとなつた。盛會を祈る。

▼濱田久米雄君(川協理事)は三月十日上京、その夜の「柳友」七周年記念大會に出席、十五日歸廣。

▼森東魚君(川協名譽會員)は出張先、新居濱市の寄宿家屋全燒の厄に遭遇されたが、辛じて救出せられたことは不幸中の幸であつた。

▼神尾三休君(函館市外)と、龜井晟修君(川協名譽會員)を顧問に本年一月改組された函館川柳社では三月十七日に二十五周年記念大會を開催した

▼石崎柳石君(川協理事)は廣島文理大の國文教室に入られた。

▼梶川蘇堂君(神戸)は大阪鐵道局運輸部庶務課へ榮轉された。

▼靜岡大火罹災川柳人への御見舞金は罹災者の一人榎田竹林君(川協名譽會員)宛に左の通り送金し、萬遺漏なきやう手配を終了したので御報告申上げる。

金貳拾圓也　榎田竹林殿
金參拾六圓貳拾錢也　罹災川柳人各位

なほ上記御見舞金を弊協會へ寄托された諸賢の芳名は左の通りである。(申込順敬稱略)

十口　麻生路郎
二口　櫻川不水
二口　田川亂耽

二口　永田里九
二口　姫田夕鐘
二口　水谷鮎美
二口　橋本綠雨
二口　高橋かほる
二口　長崎柳秀
二口　松坂倶樂部川柳講座
二口　上田朴堂
二口　稲岡德二
二口　白山五遊
二口　小川羅行
二口　松井漢三

以上、合計百十二口
十二口　廿錢▼阿部美也子女史(高砂丸にて)から「思ひがけない船迄の御見送り、心強く思ひましたその上美しい箱に入つたお菓子、時色のリボンは早速ほどきました。一行中の一等可愛い人と一緒にいただきましたお船はとても樂です。私付のボーイさんも却々よく氣をつけてくれますのでまるでお姫樣にでもなつたやうに自分の身の廻りは不自由することはありません。只今船室の窓に夜明の島々が微かな灯を明滅させ乍ら迫つて來ます」若し何かお知らせいただくのでしたら香港總領事館氣付にて願ひます」「出船前の紫のテープの振動は指にこたへました」

十口　松村夢兒
十口　藤青裡
十口　西後を
十口　福田山雨路樓
十口　岩崎柳代
十口　森峰魚兒
五口　高尾行
十口　丸湖潮花
二口　今西秋
二口　阪大川月
二口　田中雨
二口　藤寺井銳
二口　岡至瑠
二口　佐平々
二口　橋本造
二口　平波夢三
二口　立川跳朱二
二口　金田木

金持の衣物着心地惡くなし
戴冠式僞王無邪氣に待つてゐる
めでたし〳〵力と楯をすてる音

石井白面人

嚴命で自信ないのに又出掛け
强がつて見ても弱氣は生れつき
怒らせて見ると相手もあなどれず
傲然と張つた虛勢は座らない
野性美をお城育ちに見詰められ
辯解は人事盡したやうに云ひ
弱點もあつて結局智慧を貸し
それが戀ですよと周圍の太鼓判
戀知つてノーがイエスのことも知り
情熱に克つて淋しい日がつゞき

獨ウファ映畫

最後の一兵まで

須崎豆秋

一人だけになる大行進の靴音か
コンクリー對肉彈のいくさなる
決戰に發つ身言ひ置くこともなし
鳩便に最後を托し空を見る
血がついてゐる鳩便に手が慄るへ

高價なる勝利一兵だけ殘り

廿世紀フォックス映畫 **ス・エズ**

夷一笑

豫言者の言葉笑つて取あわず
戀人と別れてバリーあとにする
エジプトの沙漠で虹を見つけたり
虹は消えても心に燃える火はきえず
さびしくも裏切者と呼ばれる身
其の罪は女にありと言へようか
豫言者の言葉通りになつてゐた
イギリスはさすがだまつて見て居らず

映畫 **三味線武士**

田中青風

持物は違はぬ宵の水死人
また元の武士になる日の三味を捨て

淑髮ウエーヴは
大阪・心齋橋筋周防町角
ナショナルへ
子倫營
口經
山南992電

募集句 一路集

霞

乃選

名所圖繪霞にそびえるものばかり　葉光
行商の夫婦霞の中を來る　潮花
ポン〳〵の煙そのまま霞むなり　愛鳩
鯛網の人と賑ふ春霞　みづほ
ステッキを振り〳〵霞む丘を越し　東狂子
春霞袂をわかつ友があり　水虹
春霞試驗勉强が嫌になり　春巣
幸福がつかまれさうな春霞　久枝
朗らかになつてきちがひ霞へ來　不水
霞かすみ眼鏡の玉はうたがはれ　南濃路
春霞銃後の妻に迫るなり　芳郎
グライダー霞の奥に見落され　叫史
櫓の音も霞へ這入る春の川　照波
トンネルへ霞と共に吸ひ込まれ　白鷗
ビルデイング高く都會の朝霞　嘘川
俗人に霞が邪魔な鳥瞰圖　鐘生
春霞甘い思ひ出持つてくる　洋
遠足の列に春の野霞んでる　青風
センタボールの日の丸霞む佳き日　巨人
花霞長袖の世になるまいか　善衛
史蹟まだ霞の中にねむつてる　九呂平
春霞線路工夫のよく休み　文庫
バスに見る我家の當り霞んでゐ　蜃氣樓
巣立ちの希望霞へとけこんで　曉明
仙人はいいよ霞で生きられる　風葉
子の夢の王子霞を拔けて來る　曉童
(人)春霞家にゐるとは能がなし　黑源太
(地)名刹のすそは霞となる繪卷　水客
(天)春霞まだ念佛はきらひなり　市多樓
(軸)人世を霞と見てる親がかり　久米雄

選

女車掌

女車掌男に勝る腕を見せ　朗舟
すみませんと女車掌はすませてる　德磨
醉客へ女車掌の逆はず　嘘川
車庫入りの女車掌はよくしやべり　芳郎
關取を女車掌は振り返り　指洋
終電車女車掌は小さくゐる　牛歩
女車掌侮り難い聲を出し　松太樓
女車掌いつもの顔に出會ふたり　巨人
サービスへ女車掌は子を抱へ　抱逸
女車掌謝ることを先ず覺え　としを
頰紅へ流石車掌も女なり　暢爺
滿員車女車掌が大きすぎ　翠坊
子を連れて女車掌に感謝する　ライト
遊覽車女車掌はのど自慢　芳郎
勤續で光る女の車掌服　照波
視線に怯ぢぬ女車掌のアクセント　鐘生
雜誌から女車掌は覗かれる　蜃氣樓
松葉杖女車掌は肩を貸し　孤舟
女車掌だん〳〵男の氣性に似　善衛
着物着て女車掌は見直され　愛鳩
女車掌そのまめ〳〵しさを買はれ　聲香
女車掌バックミラーへ覗いてる　九呂平
聖戰へ女車掌の薄化粧　美奈子
滿員車女車掌の手がぬるい　よしみ
公休を娘心に車掌ゐる　光路
バスガール家へ歸れば花を活け　葉光
女車掌ゆへに口論せずに降り　佐五郎
女車掌母へ元氣な便り書き　二乙坊
女車掌新婦如きは横目で見　不水
バスガール今日も無事故の車庫を出る　叫史
よく見れば女車掌にある小皺　曉明
バスガール帽子の色が褪せかゝり　秋史
女車掌公務と別に子をあやし　市多樓
女車掌恩師へ切符切る日なり　南濃路
女車掌に惜しい襟あし　曉童
バスガール都會のわなを知つてゐた　風來子
溜り場で女車掌の地聲聞く　双虎
男性の匂ひに女車掌むせ　不水
花吹雪女車掌がふとつまり　久枝
女車掌釣錢出す指が荒れてゐる　青風
(五)美しい車掌のバスが今日も混み　みづほ
(同)十圓札女車掌は切りに來ず　水虹
(同)女車掌釣錢をきれいな手へ渡し　春巣
(同)紐長が女車掌になつたとき　水虹
(同)女車掌どうぞ〳〵と詰めさせる　文庫
(人)はる〴〵と女車掌を志願する　彌生
(地)女車掌の前髪に花散つたまゝ　久枝
(天)バスガールカーブの月を見てゐたり　水客
(軸)曲り角女車掌の聲が張り　久米雄

川柳雜誌 四月の會

★日時　四月六日夜六時（土）
★會場　御津八幡宮（電話南八六四〇）
南區八幡町佐野屋橋筋角（木棉橋電停下車東一丁・八幡町市バス停西一丁）
★兼題　「靴」（三句）……水谷鮎美選
★柳話　「句作上の諸注意」……麻生路郎
★會費　三〇錢（川協章提示の方は二五錢）
★呈賞　天位（各題）に粗品を贈る
幹事　春巣・潮花・由布・紫香・白面人
滿潮・里十九

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六（昭和ビル）
主催　川柳雜誌社
電話佐堀八一六三三番　三三三三

——本社の句會は毎月第一土曜——

非特異性全免疫元
オムニコンメッツ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜萃）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、產褥熱、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に涉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包裝）
二〇〇瓦管入　二〇〇〇瓦管入
二五〇瓦管入　一〇〇〇瓦管入
一〇〇〇瓦管入
發賣元　株式會社黑田藥品商會
大阪・東京
—文獻贈呈—

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

雜川 本社三月例會（大阪）

三月二日　於 御津八幡宮

出席者（順不同）
路郎・巨人・龍成・寄與史・富士・綠水・白帆・潮花・紫香・湖秋・かほる・笑門・八櫻・正路・水客・指洋・夜王・光路（朝野）・默平・春巢・水虹・久枝・萬的・夕鐘・孤蓬・水路・翠陽・鮎美・滿潮・八九滿・白柳子・紅多呂・安靜・白面人・亂耽・つや子・小松園・八步・里十九・葭乃・リリ

席題　向不見　互選

向不見それもよかつた歸還兵　安靜
向不見若奥様の年を聞き　滿潮
向不見電車の方が立ちどまり　久枝
向不見そこを社長に認められ　默平

席題　片肌　白柳子選

氣合術片肌ぬいで本を賣り　白帆
片肌になつて女優の部屋ぬくし　水客
片肌に今日のカンナの切れ具合　夜王
片肌をぬいで苦學の宿を貸し　指洋
片肌のやりばに困る眼を感じ　八九滿
興奮をなだめ片肌入れてやり　巨人
親方は片肌弟子は汗を拭き　鮎美

席題　仕度金　八步選

仕度金目當でないと念を推し　水虹
仕度金物價騰貴も織り込んで　小松園
仕度金でもめた事等云はず嫁き　久枝
仕度金さてそれからの墨をすり　亂耽
仕度金義理の仲なる口を利き　夕鐘
仕度金女將の意志へまだ忝はず　正路
長持にとどきかねてる仕度金　滿潮
父の顔淋しく見へる仕度金　孤蓬
（佳）仕度金陽ざしの中で數へられ　水客選

席題　指紋

犯人はインテリ指紋殘してず　春巢
ビッタリと指紋が合ふて恐れ入り　富士
しやく放されるに指紋などとられ　潮花
（人）善人の指紋であつて用はなし　八九滿
（地）落ちぶれた或る日は指紋までとられ　水虹
（天）働いてゐる手の指紋笑はれる　光路
（軸）拇印でもいゝと勸誘のがさない　水客

相撲吟　お轉婆

お元氣ですねえとお轉婆ほめられた　萬的
唄しきり未だお轉婆が直らない　安靜
（優）喪服着て立てばお轉婆とは見えず　龍成

兼題　赤インキ　かほる選

婆さんのイツチ嫌ひな赤インキ　默平
藏ざらへ純綿と大きく赤インキ　指洋
赤インキちりを拂つて出して呉れ　滿潮
劇作家台詞を直す赤インキ　白柳子
赤インキつけて拾錢無心に來　紫香
末の子の屆かぬとこに赤インキ　夕鐘
あるだけの雜巾が要る赤インキ　默平
琴の爪取つて目立つた赤インキ　鮎美
赤インキ暮に使つた其のまんま　夜王
赤インキですかと給仕念を押し　富士
社長室無駄にも見える赤インキ　綠水
（秀）榮轉の人に貰ふた赤インキ　紅多呂
（軸）赤インキ香具師は御覽の通り消し　かほる

兼題　花の留守　路郎選

病人に留守を賴んで來た花見　寄與史
集金が舌打ちをする花の留守　紫香
ちと早い晝飯にして花の留守　夜王
背伸びする猫を見てゐる花の留守　紅多呂
花のるす芦屋夫人へ一通話　亂耽
卷きずしのへたをつまんで花の留守　かほる
花の留守電話へ煩さそうに立ち　巨人
物干を隣が使ふ花の留守　紫香
花見したついでによれば花の留守　湖秋
花の留守天井の湯氣ぽつと來る　亂耽
近所から賴まれてゐる花の留守　潮花
ガス自殺花の留守かと思ひしに　滿潮
花の留守師匠の部屋を廣く見る　八九滿
花の留守あてがひぶちの酒に醉ひ　葭乃
花の留守見樣見眞似に塗つて見る　白面人
御主人が恨めしくなる花の留守　巨人
花の留守先月分を取りに來る　翠陽
花の留守切り花少し買うて來る　萬的
花の留守母なか〳〵に用があり　潮花
花の留守馬の足音聞こえてき　かほる
（人）花の留守うるさかつたとも云へず　寄與史
（地）花の留守母がやつぱり殘される　綠水
（天）屈托もなく花の留守佛間にゐ　八步
（軸）おもむろに墨をすつてる花の留守　路郎

雜川 廣島支部句會（廣島）

一月二十六日　濱田久米雄報

母危篤たゞ念佛で越えて行き　紫浪
念佛にだん〳〵變る婆婆の慾　麥作
念佛が云へて祖母には可愛いゝ子　幽香里
寒念佛商店法にもの足らず　三昧
いじらしい念佛にあふ本願寺　秋無草
念佛の膝へ來た子も手を合はせ　秋史
惡口を云ひにわざ〳〵廻つて來　久子
修養のあるが惡口から離れ　久米雄
氣の合はぬ猪口へ因緣つけて出し　天國
惡口へだまつて居れぬ顏を上げ　田鶴子
惡口を聞いてもらひにおすそわけ　秋無草
拜啓と書いて書置ちとおかし　演兼子
書置は意外な人に金を分け　幽香里
書置は二人出會つた日を憶ひ　久米雄
書置へ慌てた母の足袋はだし　秋史
書置へ何にも書かぬことに決め　演兼子
愛嬌のよさを譽めてる初節句　伯峯
愛嬌に約束をして恐くなり　俗菩薩
鼻唄で三十男ぶいと出る　露斗

みさごグループ句會（廣島）

荒西草雲子、眞下麥作、鈴木一雄三君の任官を祝して　得能紫浪報

腕前を見せてやり度い國の母　三郎
フグ料理その腕前を信じかね　伯峯
腕前と別に社長の子が社長　須彌浩
いゝ腕を持ち轉業の列に入り　風來子
自信ある腕ゆつくりと煙草吸ひ　同
腕前へ誰か云ひ出す嫁の世話　紫浪
寄附帳に遂に自分の名が書かれ　久米雄
なみ〳〵と酌げ腕前を見せやうぞ　市多樓
敵味方忘れ拍手もホームラン　よし江
敗戰をねぎろうてゐる拍手なり　比呂夫
感激の拍手マイクに溢れたり　三平
祝杯の主人はいつか雲がくれ　はな子

雜川 鐵道病院支部句會（大阪）

二月九日　北川春巢報

炬燵から飛び下りる子を持て餘し　幸路
冷え切つた炬燵へ朝を意識する　柳太
置炬燵地酒と言へど捨て難し　某人
氣安さは炬燵へぢかに通される　水客
高下駄で來た戀人に見下ろされ　水虹
高下駄で來る集金はたかゞ知れ　水客
膨大な豫算を寒く聞いて居り　理市
豫算など立てず身投げの旅に出る　久枝
病氣する事も豫算に入れてあり　春巢
豫算外の銚子一本づゝ賴み　萬的
豫算又男の無駄に崩される　某人
大臣になれず何時迄豫算通　嘘川
送別會主賓は少し遲れて來　苦樂公
遲刻する積り鷄にも餌をやり　某人
老人の店買溜めがある瞻　萬的

子澤山買溜めでない事を言ひ　春巣
酒倉の火事へ上戸が口惜しがり　嘘川
ボヤ出した事も成功談のうち　伸一路
遠方の火事へ戸締りして出掛け　三公
消防も皆呆然と山の火事　紫花
大火事の後へ靜かな雨が降り　嘘川

川雑　**竹原支部句會**（廣島縣）　西野みづほ報
二月十五日

中傷のこだはり解けぬまずい膳　芳郎
食堂車意外な顔に廻り合ひ　愛鳩
品不足献立表にもあからさま　みづほ
おごられる方がメニューへ目を通し　芳泉

川雑　**鶴町支部句會**（大阪）　岩橋双虎報
二月十五日

祭壇の寫眞へ妻として泣かず　善衛
こんな時もあつたかと寫眞帳　よしみ
せんべいをやつて寫した奈良の鹿　ライト
後繼ぎを生んだと寫眞送られる　善衛
乳母車日向に置いて編んでゐる　牛歩
卒業をさせる氣でゐる手内職・　双虎
内職へ身の入り過ぎる不倖　佐五郎
母として隣りへ文句あるのなり　双虎
急行で一本頼む繃のれん　松太樓

川雑　**蒙疆支部句會**（張家口）　岩崎柳路報
二月十八日

婦人會もう營兵の顔見知り　みのる
九段坂國婦の襷に風があり　桃水
婦人會勇士へ手を振り旗を振り　桃水
子澤山婦人會にも出られません　幽鳳
婦人會會費だけでも納めとこ　同
お茶を汲む手付も馴れた婦人會　三風樓
空っ風切つて國婦の足輕く　松代
村長がへこまされてる婦人會　柳路
婦人會若奥様の薄化粧　同
大欠伸して先生に指差され　三風樓
欠伸して飲んだ番茶のぬるい事　みのる
欠伸して何思ふたか起上り　桃水
東京のお客へねむい子の欠伸　同
欠伸した窓のむこうに小鳥籠　默人
出かゝつた欠伸え突如電話ベル　同
もう歸れと言はぬばかりの欠伸を　幽鳳
欠伸して猫お隣の家根へ行き　松代
馬鹿になる積り欠伸で待つて居る　同
欠伸したついでに見てる掛時計　柳路
留守番の欠伸へひよいと猫が來た　同

川雑　**葉櫻支部句會**（大阪）　多田一波報
二月廿五日

孝行のつもり一合買ふて來る　湖秋
孝行を誓つて兄は國を出る　一水
親分の肩もむ耳は雨を聞き　潮花
愛犬は散歩の順を知つてゐる　紫香
活け花を貴方と呼んで見て貰ひ　秀溪
仲人が羨むほどの仲を見せ　南風
仲人は村長さんときめて來る　みのる
嫁ぐ日のめだつ娘の厚化粧　笑門
嫁ぐ日の晴着を母と共に縫ひ　翠花

懸賞川柳

★化粧新聞社柳壇

課題「柳」四月十日
「洗濯」五月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先　堺市出島町三五一番地
不朽洞

西日本鐵道川柳大會（下關）　多田市多樓報
三月三日

氣の向いた日には雑巾良く動き　白海
雑巾に刺すものがない妻の愚痴　桃水
粗相した子へ雑巾があはてゝ來　不川
雑巾が出來て嬉しい女の子　代志久
雑巾と思へぬまでによく破れ　潮流
雑談へ大きな咳をして入り　久米雄
雑談で思はぬ人の過去を知り　進
母が來て話題がそれとなく變り　秋史
雑談に彼氏得意のエピソート　暢爺
雑談に花を咲かせる記者溜り　鶯郷
雑談へ支那語も入れる歸還兵　不二翁
祝電の時機を幹事は考へる　白陽子
祝電を打つてをけよと課長言ひ　山彦
祝電は以下何通で葬られ　米三
祝電を出して勝手な用に出る　禾乃
祝電の誤字で幹事と幹事揉め　默笑
祝電の配達幕をしやがんで出　某人
祝電の蔭に母親かしこまり　のぼる
だしぬけの聲を揃へて漫才師　紫浪
だしぬけに死にグループを寒がら　春巣
畑賣る話ひよつこり歸つてき　水客
軍鷄抱いた儘で本署へ連れてかれ　一旦
インフレの組がのさばる青切符　不水
檢札に老母戚田の札を出し　晴朗
込み合つた中へ鋏の音が行き　琴月
宮の切符と錢を肌に付け　十七八
切符を出して鮮人下車をきゝ　松翁
寫眞機へニッコリ笑ふ赤襷　南泉
出發の窓の笑顔へ涙ぐみ　文福
ゴールイン立つた笑顔で寫される　かしう
初任給襷の母を笑はせる　十七八
笑ひ過ぎ父のけはしい眼を感じ　秋史
微笑んで見せようとする水枕　御堂
春の日に生毛が淡い子の笑顔　某人
二日醉ひ虫齒にしみる朝の水　九呂平
虫齒拔く準備へ母が邪魔になり　琴月
春にでもなればと母は氣が長い　十七八
春はもう九尺二間を開け放し　風來子
春模様死んだ子供の好きな柄　市多樓
國難を無視して春の陽に遊び　久米雄
春の村歩けば餅の燒けた聲　松翁
牛の綱牛もゆつくり春の土手　麥作
春の風ときゝゥキへ來て鬱り　九天
植木棚一鉢づゝの春が來る　秋史
春の夜を我獨りゐる影坊子　不川
聖戰だ敵の墓標へ花を立て　桃水
子を置いて征く友達の男ぶり　文庫
時局知る妻から匂ふものが減り　水鳴
聖戰へマダ〳〵兵の有る强味　十七八
靖國でいつでも合へる銃を執り　不二翁
聖戰の旗が擴がるかべの地圖　南泉
聖戰の春を散髮せず迎へ　九天
春集

第三回有恒倶樂部松坂倶樂部合同川柳會（大阪）　寺井鋭々報
一月二十四日

親切、パイプ
禁煙が破れてパイプ惜しくなり　雨月
辭書の上パイプへ冬の夜が更ける　萬雷
こみ入つた話パイプをしまい込む　朴堂
法螺ばかり吹いてもパイプ淋しい日　同
溫泉地パイプとショールで滿員だ　平三
約束が遲れてパイプ荒く吹き　同
ア、急わし左手にパイプ右手にペン　至藝瑠
燒けそうに成つたパイプの熱心さ　同
窓の外は春なりパイプ庭へ出ん　鋭々
サンルーム思ふことなきパイプ也　同
凝り性のパイプの艶が氣に入らず　普天
强談に社長パイプの手が震へ　同
代表の眼に憎々しいパイプなり　美根子
ダンヒル〳〵ナイトガウンの御前様　同
督促の片手パイプを持つてあそび　丹路
表情も靜かにパイプ貸さぬなり　同
聞いて呉れて居るのかパイプがある丈　生々庵
二千六百年禁煙パイプ買うて見る　同
パイプなしに喫ふ麗人の細い指　同
重役のパイプ嘯く道具也　鋭々
彼の人のパイプかむくせ眼にのり　美根子
女には親切さうに直ぐに立ち　五遊
デパートの親切廣告ほどでなし　行三
ア、俺も親切受ける身となつた　至藝瑠
微笑するだけの親切拜まれて　鋭々
親切が妙な漢藥呉れて行き　同
親切な見舞仲々歸らない　朴堂
親切な人に手を燒く未亡人　普天
讓られた席へけんたいらしく掛け　白面人
ふるさとはよし親切な人と會ひ　丹路
親切な奴さと馬鹿にされてゐる　至藝瑠
親切とは別に借用書をかゝせ　孤篷
商談を濟ましたらしいドアが開き　鋭々
酒にしてから商談が動きかけ　孤篷
商談へコーヒだまつて置いて行き　同
煮えきらぬ商談コーヒ冷めて行き　美根子
算盤を斜に商談繩らず　朴堂
商談の不調へへへと笑ふだけ　孤篷
人前もあるのに家内が家内がと言ひ　行三
人前は控へ目にして居る許婚　雨月
人前は自家用もあり家扶もゐる　至藝瑠
人前でする萬歳も兵の妻　萬雷
第二夫人もう人前をはゞからず　丹路

人前ぢや妻に反對しても見る　白面人
人前でこらえた涙佛前へ　美根子
モデルもう赤くもならず脱ぎ捨てる　孤蓬
人前でなければやれぬ漫才師　生々庵
人前で喋舌るに少し飲んでゆき　白面人
人前よ他人行儀になされませ　至藝瑠
水仙が匂ふ机へ置手紙　鋭々
置手紙して船底の夜を明し　萬雷
もう死んで居るかも知れぬ置手紙　朴堂
置手紙心當りへ電話する　同
成功の夢が果敢ない置手紙　白面人
就職のあてがはづれた置手紙　同
心臓の弱さ無心を置手紙　生々庵
移り香のまだ殘つてる置手紙　同
置手紙いひたい事もあつたのに　美根子
留守番の手から冷たい置手紙　同
置手紙昔のまゝの右下り　孤蓬
與太話して去にしなに置手紙　萬雷
置手紙どうせ無心にされてゐる　至藝瑠
置手紙街は二月の風の底　丹路
探偵もスリも知つてゝ見る芝居　万雷
探偵とちぼ同じ風體だ　平三
手なづけた筈のおなべが功一級　雨月
湯錢で逢へば刑事の人のよさ　鋭々
探偵とさとられた後がこわい顔　生々庵
黴くさい猫探偵の眼に追はれ　孤蓬
探偵の眼鏡の中のネオンの灯　同
探偵の樣に丁稚を尾行させ　美根子
探偵眼夫のきげんを見逃さず　同
探偵と夫人と應接室靜か　丹路
探偵の何氣なく見る裸婦の像　同
探偵の或日手錠の手入れする　朴堂
探偵の結果は冷たいけりがつき　美根子
不倖せ探偵等に生れ付き　生々庵
探偵へ不敵な挑戰狀が來る　白面人

三重女追悼句會（豐中）

丸尾潮花報

一月二十日

面影のまだある部屋の一週忌　湖秋
思ひ出もまだ新しい一週忌　細泉
一週忌無口の父と二人ゐる　水客
一週忌寫眞大きく伸される　紫香
亡き父の遺愛の鉢へ春が來る　南風
軍事便形見となつて屆けられ　秀溪
遭難の形見を丸う取りかこみ　潮花

松坂倶樂部句會（大阪）

石井白面人報

二月四日

もう喰へぬ頃に饅頭出して來る　普天
支那のそば老婆に似たる萎びやう　方正
支那料理その色彩に似て夫人　丹路
一卓に家族親和の支那料理　美根子
支那料理これは何やとつまみ出し　白面人
番號で註文しとく支那料理　同
大國ののんびりとして箸長し　路郎
淀君とよばれて女社長老け　友章
宅訪へば女社長は趣味の人　美根子
女社長女に歸るコンパクト　生々庵
女社長炭のことまで云ひ添へる　丹路
女社長今日のメモには歌の會　同
女社長色氣忘れたやうに云ひ　方正
名義だけ女社長となつてゐる　同
女社長のヒスにタイプがやめて去に　同
北濱の電話も女社長馴れ　孤蓬
女社長一粒種に生れつき　同
損益表女社長の眼が流れ　同
女社長男ならばと惜しがられ　白面人
女社長今日も切符が斷はれず　同
大學をでるまで母が社長なり　同
女社長秘書もやつぱり女なり　普天
後家まけて居らず社長で立つて行き　同
女社長泣きの一手も知つてゐる　同
會議室女社長は座りたし　普天
パトロンが寄つて女將を社長にし　同
女社長デパートの借りは別にする　路郎
女社長うつかり僕と云つちまひ　同
女社長夢の話もして歸り　丹路
外遊の子が祝電の誕生日　方正
誕生日覺え切れないほどに產み　孤蓬
空つ風今日は丁稚の誕生日　生々庵
あゝ今日は俺の誕生日だつたのに　同
福は内鬼追ひ出して誕生日　同
率公日にあたつて困る誕生日　白面人
誕生日母は忘れしまゝに老け　同
誕生に立つた〳〵と騷ぐなり　普天
此の小鯛高うなつたと誕生日　同
誕生日母は去年の身長を云ひ　路郎
誕生日うつかり忘れられるとこ　同
誕生日國を出た日と同じ也　路郎
誕生日瀧の白糸型に禿げ　同

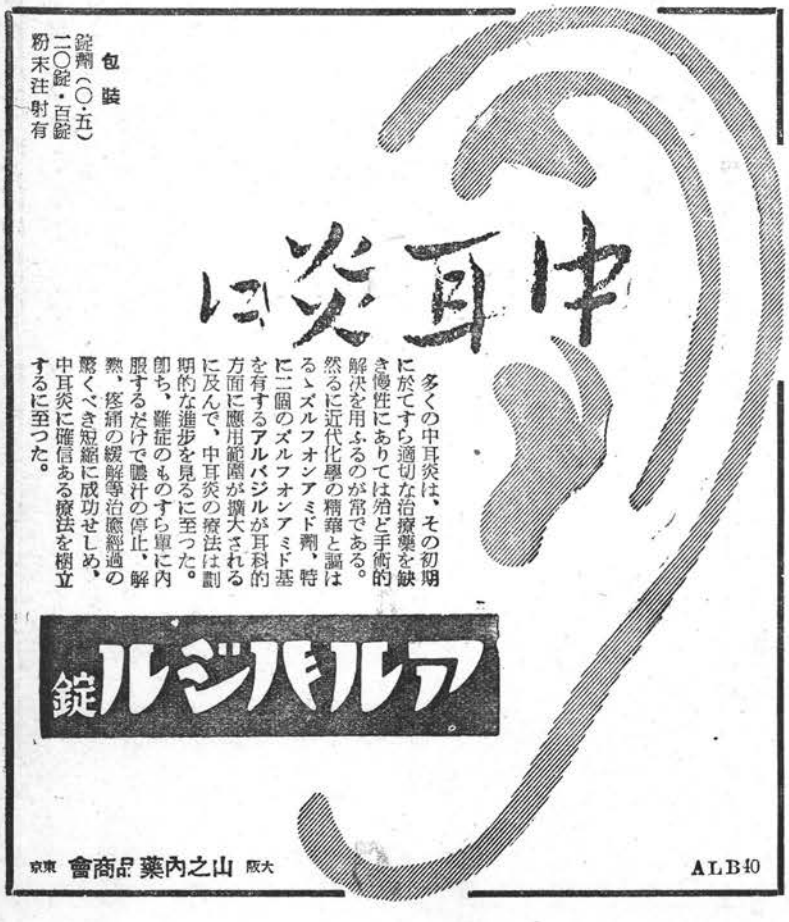
二月十八日

惡筆が金一封を賴みに來　孤蓬
惡筆がこの大臣の取りえなり　生々庵
惡筆のさすが手紙の無駄はなし　普天
惡筆の惡筆なりに枯れてゆき　同
惡筆だでも大學は出てゐるが　美根子
無心狀もう惡筆にかゝはらず　丹路
子を案じて書く惡筆のはゞからず　白面人
こんなのに値があるのかと名士の書　同
立身をして惡筆の名が高し　同
惡筆のまゝで國旗に署名する　同
老骨へ梅の氣分がわかつて來　丹路
物好きやなあと梅見の供そしり　白面人
梅の酒さも惜しさうに酌いでくれ　孤蓬
此の一軸自慢したさの梅の客　美根子
邸宅が茶寮と代り梅が咲く　普天
利己主義の格子構へで顔出さず　美根子
エゴイストそれは可愛いゝ人であり　白面人
何とでも云へと米炭積み重ね　同
利己主義で通れば寄附も云うて來ず　孤蓬
憎まれる事が嫌ひなエゴイスト　同
あゝ遂に世を果敢なんだエゴイスト　同

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報

インチキの時計大人を悦ばせ　柳秀
をろかさに根のない植木つかまされ　同
メッキだと知れて旦那が嫌になり　四朗
氣前よく買へばさくらでありにけり　方正
インチキの名刺百枚刷りは刷り　春巣
インチキに掛つた話自慢にし　同
子を連れたのがインチキにかゝなり　栞
女まだインチキでないと思ひ込み　同
インチキに掛り自分をさげしみぬ　芳一
インチキな藥買はせる子のやまひ　利生
インチキはデカを怖がる風をして　栞
鑾れさは幽靈株を持ち續け　水虹
インチキの呉服箪笥の底に入れ　栞
痩せこけてまだ〳〵生きる胸を病み　柳秀
痩せかたはたゞの病と思はれず　同
飯を喰へ喰へと痩せぎしからかはれ　利生
かたくなゝ父は九貫八百目　方正
金火箸と云はれ餘生を全うし　春巣
友達と風呂へはいらぬ痩せつぽち　芳一
盲縞着て金持の痩せてゐる　利生
レースボートのやうに痩せぎし足早し　同
カマキリと云はれてすごい腕をもち　芳一
痩せぎしは顔の皺から更けてゆき　利生
女房の頭痛ひるから雨になり　方正
新聞は晴れ雨だれの音しげし　山彦
女房の今日の自慢は傘を持ち　柳秀
天氣豫報病人だけが聞いてゐる　春巣
測候所と呼ばれるオッサン無學にて　青一路
天氣豫報聞いて履物替へてゐる　芳一
高下駄は天氣豫報に裏切られ　栞
おかしさは天氣豫報に疳を立て　同
逢ひ引は天氣の事にふれてゐず　栞
いつそのこと天氣豫報のうらをゆく　同
一徹は天氣豫報に目も呉れず　橙舍
測候所今日は尻がくるなと思ひ　同
ラヂオなどあてになるかと雨に逢ひ　柳秀



記後

★★★★★★★★

▼彼岸もすぎてすつかり春めいて來た。「さすが銃後櫻は咲いただけですみ」の句をおもひ出す。この春も櫻は咲いても花に狂ふ心は國民擧つておさへねばならぬ。

▼前號は素派らしい實れ行きだつたが、紙不足で增册は差控えねばならないので、なるべく直接購讀がのぞましい。

▼川柳人以外の名士名流の職業上に或は日常生活に、實際觸れられたユーモアを本誌特別原稿として次ぎ〳〵に御寄稿を仰ぎ誌上を飾ることとした。本號澤田博士の隨筆「種痘の跡」がそれである。種痘は皮切りだからといふ洒落でもあるまいが、隨筆の第一陣は美事にホームランを毫ッ飛ばされた形だ。次は？？？

▼表紙「中之島風景」はフランス歸りの福富雷童畵伯が、昨年末特に我が社のため寒風にさらされながら、スケッチされた力作である。その反響の大きかつたのも故なきに非らずだ。

▼「各地柳壇」は紙面不足のため、まず〳〵嚴選の止むなき狀態である。增ページしたいが印刷屋から增ページを承知して呉れない狀態だ。時局を認識されて御諒恕を乞ふ。

▼「一路集」課題は本號から海外の選者並びに應募者の便宜上三ヶ月分を發表することとした。（路郎）

募集

第十七卷 第五號課題
三月卅日締切（十句以內）
やけぐ　福田山雨樓選
商店法　吉田水車選

第十七卷 第六號課題
四月廿五日締切（十句以內）
國境　高須啞三味選
枕木　岡田某人選

第十七卷 第七號課題
五月廿日締切（十句以內）
家相　橋本綠雨選
神棚　清水白柳子選

毎號募集（毎月五日締切）
近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畵）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十五年三月廿五日印刷
昭和十五年四月一日發行

第十七卷　第四號
（毎月一回一日發行）

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三番）（八一六三番）（八一一四番）
振替大阪七五〇五〇番

載轉斷無禁
本誌は行刊の日有保證新聞紙法に據る

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

社關係の人々（いろは順）

主幹　麻生路郎

賛助員
池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　頴原退蔵　淺田一　末弘巖太郎

客員
鳥山一歩　篠原春雨　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　龜井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　生方敏郎　高尾亮雄　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田雀郎　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　小林不浪人　森東魚

不朽洞會員
橋本綠雨　高橋かぼる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　須崎豆秋　春元紀太　松下小柳子　西いわを　後藤胥兒　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　上田耕二　戸倉普天　小畑自由朔　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　黒川紫香　丸尾潮花　大坂形水　櫻多田一水　田中風葉　中原銃人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　岩本雀踊子　清水友帆　松井丹坊　石野秀雄　水史路　清水白柳子　布施筑川　小林澄舍　石尾正方　崎本正　竹香附子　佐谷たけを　押谷彦　西尾根山　關乘　北山悟郎　水谷鮎美　姫田夕鐘　村松夢裡　市塲沒食子　吉田水車　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　妹尾八九滿　橋本雙虎　平佐平三　田中月　岩崎松代　岡田某人　姫田某　北川春巢

★

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし　九三會支部（大阪）悟郎　函館支部（函館）晟修　梅田支部（大阪）鮎美　籔川支部（島根）綠之助　鳥取支部（鳥取）鐵州　松山支部（松山）虻之麿　天王寺支部（大阪）八九滿　鶴町支部（大阪）双虎　御池橋支部（大阪）いわを　松江支部（松江）山川兒　大鐵局支部（大阪）水客　西條支部（愛媛）英賀夫　今里支部（大阪）沒食子　今治支部（今治）文庫　光笑會（大阪）里十九　竹原支部（廣島）芳郎　十三支部（大阪）牧人　廣島支部（廣島）風來子　名古屋支部（名古屋）水車　豊中支部（豊中）紫香　下關支部（下關）市多樓　北鮮支部（清津府）美笑　蒙彊支部（張家口）柳路　上海支部（中華）天作　鐵道病院支部（大阪）春巢　葉櫻支部（大阪）一波　四ッ橋支部（大阪）翠芳　布哇支部（布哇）覺花麗

賣捌書店

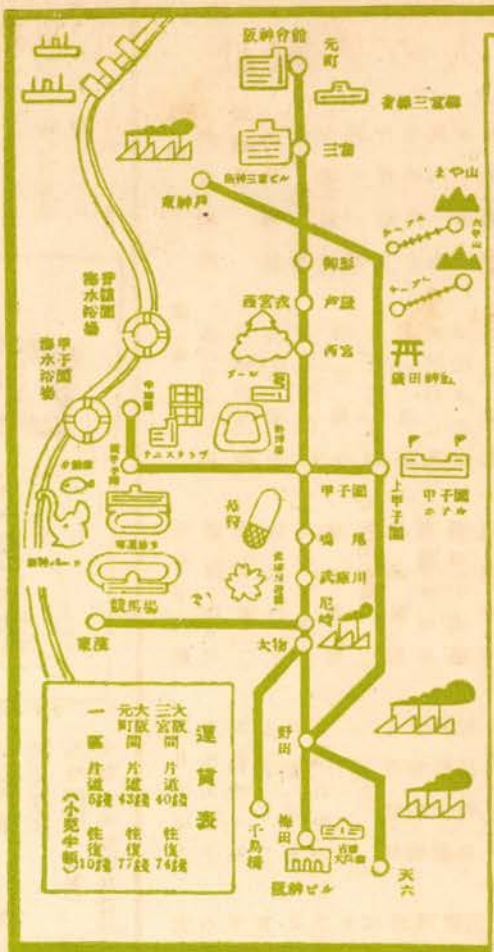
（大阪）參文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大阪市の交通中心點より
神戸市の中央、元町まで

またずにのれる

阪神電車で

特急運轉 午前五時より
午前零時まで 頻發



阪神電車

武田發賣品

胃酸過多症・胃痛に

鎮痛 制酸

ノルモザン錠

ノルモザン錠の治療作用は、服用後先づ胃の粘膜を被覆防護し、次ぎに分解して過剰胃酸を吸著し或は分泌腺を攻撃して胃液の分泌を抑制するにあり、又本劑はロートエキスの配合により胃痛を緩解す

【主治効能】胃潰瘍、胃酸過多症、溜飲、胃痛、胃痙攣、便秘、悪酔、二日酔、飲み過ぎ薬

【價格】一日分(三〇錠)一日分(四〇錠)一週間分(一四〇錠)
一日分(三錠)一ヶ月分(四四〇錠)二ヶ月分(五四〇錠)

發賣元 武田長兵衛商店 大阪市道修町

38(2):12

三月の五月人形

わけて意義ある紀元二千六百年の端午——鯉のぼりも勇しく凛々しい武者人形や、鎧、兜、矢屏風、陣太鼓を列べて、興亞不屈の魂を幼な心に植ゑん哉

大阪高麗橋
三越
休定曜月

SENRYU ZASSHI

Published montly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan,

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年三月廿八日郵便物認可　昭和十五年四月一日發行

川柳雑誌　NO.195

定價金30錢　送料壹錢

りとびきに

美顔水

ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ぜヒお勸めしたい藥です！

▲定價一瓶四十錢・六十錢・一圓廿五錢・全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に　ゼヒ此藥

5—53

アブラ顔のお化粧下に最適！

美顔水　化粧用